野津原方言集

続編

はじめに　　野津原方言集続編

平成４年から取り組んだ『野津原方言調査収拾』も　平成７年に単語集の『前編』を発行。続いて平成１０年に　後編発刊の際に『前編』『後編』『こぼればなし』の３冊セットで　刊行致しました。多くの方々のご協力によって　素晴らしい故郷の無形文化財野津原方言集が素人ばかりながら　まとめることも出来ました。

閉会の打合せ会で折角の機会に集めた　資料の残りも生かして後のち　調査や収拾される方々のお役に立てばと　続編にも取り組んで整理編集致しました。内容としては主に『心に残る方言』を重点に　幾つかのジャンルに別けて　綴ってあります。幼稚な素人集団の冊子ですから　その点はお含みおきください。

1　風習　行事など…四季
2　伝承　民話　語りべ…など
3　農村の四季…仕事　生活　女性　子供
4　故郷の古い唄　新しい歌
5　街道の旅
6　村の辻　故郷ロマン
7　方言単語　ことわざ　夢も託して
8　こぼればなし

続編発刊にあたりお力添え頂きました　多くの皆様に厚くお礼を申しあげます。貴重な資料やご提言なども出来るだけ　使用致しましたがまだ力不足で意に添えぬ　部分も多いかと思います。これからこの種の調査研究される方々に　参考とでもなれば幸せです。心に残る方言調査では内容で　多少アレンジした文もありますのでお許しください。

野津原方言調査会

方言調査から拾った温かな人の心

調査を進めて行くうちに心に残る方言　心打たれる生活言葉などが脳裏に刻まれて　いつまでも余韻を味わせてくれます。それだけ故郷の方言は人の心に　勇気づけ人間本来の生き方を教えてくれたようです。調査から頂いた諸々の伝承や語りべは　大切な人の道も教わったように思います。

子供が生活の中から学びとる自分の知恵　身近な木や竹を利用して遊ぶ　そんな暮らしの中から知的才能も芽生え　大きい子供から集団生活の中で体得する遊び。それには家庭でできない子供の世界の知恵　宝が育ってもいた。四季の遊びが道具が違うのに大きい子はキチンと　保管して遊びの機会に出してくれる。

豆ガラも利用して湯を沸かす　布切れも使えなくなると雑布にして　しまいには肥やしにもなった。暑さの夏からすごした少しでも日よけさせる為に　家のなかでフトン洗たくをさせる。アクの強い物は若嫁には食わせない。解釈では反対の意味にもなるが家族が健康であればと思う気持ちの現れでは。

諺が結構通用して意味もある。先人の体験経験から生み出した生活の知恵であり　健康管理には何より病気をしない事が必須条件でもあった　農村の生活。語り継がれた民話にも伝承話題にも　人の気持ちを代弁してくれるささやかな願いも込められている。人間の心の味方がこんな形で受け継がれても来た。

集大成の『前編　後編　こぼればなし』に続いて　今回発行する『続編』には　そんな心に残る方言から　いくつかアレンジした方法で綴り　失われ行くかも知れない故郷の生活用語　野津原方言を内蔵しています。目新しいものはなくとも心に残る　残しておきたい物を集めました。今だから出来ると思いながら……

野津原方言集…続編　『もくじ』

はじめに……1
温かな人の心……2

★　習わし　行事
農村の四季　折々に……5
ひし餅　粽だんご……8
山の神まつり……9
みうまいねとら……9
むち焼き……9
生きて行くには……10
村の狂言……11
葬儀の風習……12

★　伝承　民話
お礼の踊り……13
育ての親……14
寺が作られた……15
からすの案内……16
恵まれたカズラ……16
桃にまつわる話……17
親竜んはからい……17
道をふさいだ竜……18
まま子の洗たく……18
浅内うなぎ……19
大根と子守歌……19

★　農村生活
あんた危ねえで……20
牛の目に写った草……20
夫のいたわり……21
命の糧……22
お仏飯のご褒美……23
初参りの餅牛馬に……23
子供の世界……24
雨に濡れた田植え……25
ばっかり食い……26
万年暦……27
たきもんぶげん……27
苦言祝言夜明けまじ…28
娘と嫁と……29
生めかしい会話……30
子供は風の子……31
ばあさんの思いやり…32
美くしゅうありてー…33
子供の思いで日記……34
食生活さまざま……35

★　村の辻　ロマン
おしゃべり会話……36
ツツジの芳気……37
惚れ地蔵あれこれ……37

★　街道馬子歌
嫌いな人はいない話…38
古い歴史の跡……39
のろしと順番……40
あら麦貰い……40
レンゲ畑の囁き……41
竹の秋……41
横道から運んだ石……42

辻原よけた県道……42
葬儀の食事制限……43
三角屋敷……43
人間ですもの……44
人の真心……45
生活と周りの気象……46
★ ちょつと一服
江戸期の一両……47
子供とナイフ……47
★ 古い唄新しい歌
野津原音頭……48
猿丸太夫……48
オサシ唄……49
愛情子守歌……49
野津原慕歌……50
追憶の郷……50
野津原民謡……50
七瀬馬子歌音頭……51
しあわせ人生……51
★ 方言単語……52
★ 方言雑学……53
★ 生き続けた方言……54
★ 方言単語モザイク模様
その1……55
その2……56
★ 方言似た物でも……57
★ あとがき……58

……

野津原方言集…続編《第1部》　調査収拾企画　編集調査員

甲斐英行　利光節子　佐藤吉晴　小野寿祐　佐藤源治
那須政子　赤星ヨシミ

題字……田口　勲
挿し絵……松本英明
カット……那須政子
プリンター…佐藤源治
製本……小野寿祐
《平成10年10月》
発行……甲斐英行
……野津原方言調査会

習わし　行事　『農村の四季折々に』

正月が来てん小雪が舞う頃にえーと籾すりぅしよった。発動機が調子がいいとケックシャスルガ　朝間ん口ぃ調子が悪いとハカドラン。万石ぅ３つ立てち次々に米ぅカクル。籾がチーチョルト　ヘモドルコチーナル。旧正月ぅしよったき２日ん朝お宮に書き初めぅ張りに行く。寒い北風に半纏ぬ着せち。

モモテをする地区じゃ正月飾りん白紙ぅ集めち　張り合わせ的を作っち弓じ射ると今年の豊作が決まる。山ん神ん祭りもするが山ん仕事ん多い所んしは　皆じ祝詞あげちアターナオライ。今年も無事怪我ぉせんごつ頼む。観音祭りぅする所もあっち年寄りしが世話をゆうしちくるるき　若ぇしも段々覚ゆる。ゆうしたもんじゃ。

ひな祭りにゃヒシモチぅ作る。女ん子がサカシューソダツゴツひし形に切った餅は　白赤緑ん三色　どっかゆう似たごたるが人間の願い想いはいいもんじゃ。彼岸の中日にゃ地獄ん釜ん蓋もあくち言う。こん日はヨコウガ仕事ぅしち怪我したしを見ち　苦笑いするのも無理ゃねえ。ヨコヤヨカッタニち誰でんみな思うが。

花祭りにゃお寺じ甘茶をくるるき瓶ぬもっち　貰いに行く。家ん周りに撒くと病気になる悪魔が近寄らんち言うき　撒いたあた一飲むと何とん言えん味　『お釈迦さまの仏像に甘茶をかけたかえ』『ちゃーかけんじゃつた』『ほら罰ぅ被るど』　ゆうおどかされたもんじった。花じ飾ったお堂も美しかった。

粽を作るのが端午の節句。男ん子にゆう似たごたるきセワシガルケンド　トキワガヤに包んじキリリと絞めたな男らしい。柏ん葉に米の粉ん餅がベタベタヒッチーチ葉を取るのがヤエコチャネーがこれも楽しみじゃつた。ひし餅　粽ダンゴちいい仲ゆうしちこす末は恋人か夫婦かなえ。

お茶摘みしよったら雨が降っち来た。娘が隣じ摘みよるき止むるなー惜しいけんど　手にべとついちヒトメン。『ヤミューエ雨が降りでーたき』　娘は悔しそうにチラット横顔を見ちまぁ摘みよる。こんまま二人じここにツクボウジ……そげんわけにもいかんごたる『帰ろぅえ』『……』えーとオシナギーケンド立ち上がると娘も仕方のうたちあがった。

雨が近回りになっちナガセになった。『降るごたら荒代取りい行くき』　馬にモーガぅ引かせち蓑ぅ着くると出ちいった。麦も熟れたに忙しい事じゃ。これかるは雨が降ってん田に出らにゃならんきスズツネーシセチゲネー。田植えが始まると子供もシコーシチ田に苗は運びに行く。コビルん時田を数えたら一枚足らん　ゆう見たらコビルンショウケん下にあったと……そげー狭え田もあった。

水がねーじ植えられんじゃつた田も　半夏水が降りゃバタバタ植えらるる。そしち里芋ん葉にたまった露じ墨をすっち書くと　上手な字が出来るち言う。七夕にいろいろ書いち立つるともう夏が来た。
土用にゃウナギぅ食う。タニシん粉練りもうめー。暑い時んダッチョル体にゃジヨーんあるもんぬ食わにゃ。

盆が来るき馬屋ん肥をださにゃち親が言うと　皆じヨッチタカッちガンマクじ引き出す。馬屋ん肥をあたると手がスベスベしちかる
娘たちにゃモッテコイの仕事。晩にゃいいしと逢引するにゃ手がヤワラシイとソリャー喜ぶじゃろーき。盆のハナツマミ団子　ヤセウマ　先祖も久しぶりい帰るに羽づくろいしよるじゃろー。

シケガクルデ……２１０日頃にゃ決まっち風が雨がある。稲がせっかくゆう出来たにーなえ　顔をしがめち田のくろにたっち見ると西山ん方がくらがった。雨が大粒じゃきママゴトアソビん子供がゴザを引きこめよせん降りでーた。折角んご馳走がアリャリャ可愛いそうムゲネコサレ。

秋になっち名月っさんがやっち来た。ミーに乗せちゃるトーイモ　栗　トーキビなんかを黙っち下げち帰る。そこんしはそりゅ見ち又マスん中ぇ入れち待つちょると　次ん子が貰いにくる。『ヤンナガイトモロゥタノー』『子守しよるき二人分くれたんじゃこと』『そうじゃのーだったじゃろうが　いっときカルウちゃろうか』

神楽があるんじゃろーお宮かる太鼓ん音が聞こゆる。霜月まつりにゃ在所んしが参っちくれたけんど　話も中々出来んじ歯がいい。そりゅう気を利かせち義父さんが『祭り行っちくりゃいい』　ち言うちくれた。ほっとうれしいやら親と久しぶりん神楽見物。何かる話ちいいかあれもこれも言いてーが。

冬至とーやにゃカボチャォ食うがいいち　風ぅ引かんのと。大けんカボチャぉ取っちょいたき　こいさ炊くかな。もうデーぶん寒ぅなったき早ぅ湯にへえっち。ぬりーえ　ちょいと燃やすわな風ぅ引かんごつせんと。煙りがあんげこんげ立つちケムテーが。今年もあとちっとーになっち煙てぇだけじゃねえごたる。

節気餅ぅツクかな寒ぅなったき忙しぅなる。在所に持っち行く鏡餅ぅ早ぅつかんと柔ぇと持っち行くに困るじゃろぅ。在所ん他お医者さんやら　お寺やらにもあぐる。『やんどどー餅ぅ座敷ぃ運べ』『よだきー』『何や食わんでんいいんか』『食うで』『ほんな運ぅじ自分がんにゃツヅぅつけちょけ』

じっと見ちょると子供は正直じゃふんとツヅぅツクルゴタルキ『今な嘘ど』　大けん声じオラブモンジャキ　タマガッチシウチ真剣見よった。冬がもうそこまじ来たごたる。歳暮も買わにゃなるめー　そりー年寄れしにも何か買うちゃらにゃ済まんき。米のタマリモフウヨカッタキ。やうちがサカシイキ　イイヤンベージャ。

行事　催し　　『ひし餅』

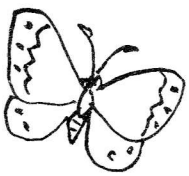
女ん子が生まるると節句に『ひし餅』が作られち　親戚やら世話になった家に配る。昔は白　緑《フツ餅》　紅　黄《アワ餅》　を重ねち三枚　五枚ち供えたが　やんがち菱形ぇ作るごつなった。女の祝いじゃき　ほらあっきーゆう似たごつ作る。サカシュウ育っちいい嫁ごになっち子を生むごつ　親の優しい思いからかん知れん。

角があるきち心配するしがあるが　始めかる丸いなー困る。角もだんだん取れちヤンガチ丸ぅなるきこす　女じゃろう。操を守っち縁に結ばるる相手も　なりゃー童貞じほしいけんど知らん過ぐるんも困る。始めちん晩に何にも出来んじアリツケバアサンが　冷汗かいたち話しよったが　これも困ったもんじゃな。

『粽だんご』

男ん子が生まるると鯉のぼりぅ立てち祝う。昔中国ん河ん狭ぇ所う鯉がセリクリオウチ上ったき　元気じ勇ましいこつかる幟になったち言う。そしち粽だんごを作るがトキワガヤに巻いち　包み隠すのんあんまり見せぶらかすにゃ　色気がねえ証かん知れん。そりゅ剥いち食うなーやっぱ縁に結ばれた　娘じゃろうき。

柏餅もつきもんじ米の粉じ作る。カンカラじ間にあわするなー殺菌力があるき生活ん知恵。柏ん葉っぱも殺菌力があるし匂いもいいき　昔んしがチャント解っち使いよったごたる。渋柿　茶の葉っぱとゆうまあ考えち使うた。男ん子がサカシュウ育つごつ親ん思いがムゲネエーゴツ解る。祝いをヨバレタナーヨカッタが祝儀ぅせにゃ　ナニシテン品が悪いきサカイジュウにゃ『おうつりゃねーけんど』ち　戻しちあとじ行かにゃナルメェ。ヨココビー。



風習行事　『山の神まつり』

正月１６日は山の神ん祭りぅする習わしがある。山ん仕事ぅするしわ特別こん日を大事にしち来た。年が明けちはじめてん１６日正月行事の中に入れてあっち　一年間怪我あやまちがねーごつ願う祭り。２日に初山行きん日は　まあ挨拶のようなギシュクじ山かるナンテン　梅なんかを折っち帰り飾ったもんじゃ。

『みうまいねとら』

節期ん餅つきにゃ　『巳　馬　亥　子　寅』ん日は　火がハジカエーち言う。くわしい事ぁわからんが　逆らわんほうがいいち　昔かる　こん日はせんじゃつた。冬ん寒い時に火を飛ばしち　近所んしに迷惑かけてん悪い。他ん日につきゃいいき　悪いち言う日にもし火事でんすりゃ　それこす人の恨みが恐ろしいき。

２９日につくと苦をつくち嫌うしもある。それかち思うと２９日は『ふく』をつきこむち　こん日にする所もあったごたる。数字と言葉は言い回し　聞きようじゃ縁起が悪かったり　よかったりもするけんど。餅つき一つにも風習が加勢しち　生活の区切りに役立ったんかん知れん。

『ムチ焼き』

牛馬を追う時にゃ竹の鞭じシビク。そん鞭を正月ん２０日に供え物ぅ下げた時　焼いた火じ竹先を焼いち作る。こん鞭じシビイテン怪我ぅせんし怪我ぅしてん　早ぅゆうなる。家庭の者とおなじごとムドガル牛馬にも　ムゲネーち思う気持ちがあるき。五月ん田植え準備ん地起こしに尻べらを叩く　鞭の音は軽やかな愛情の気持ちも入っちょるごたる。

風習　行事　　『人が生きて行くには』

子供が生まるる　嫁を迎ゆる　家が出来た　隣近所は遠い親戚よりも世話になる　付き合いも親しい。病気する火事がある時なんか一番頼りになる　当てにもされ飛び込んでも行ける。

『賑やかぅなったち言うたな』　『歩くち言うたなー』　『出来たんな　よかったなー』　すぐ気ずいて喜びに駆けつける。親子か兄弟のように。喜びを分かちあい優しさが溢れる。それだけしておけば自分たちも　人の世話になる事も出来るから。お互いに助けあうのが生活上手じゃろぅ。

『どうな機嫌ないいな　アズキゴハン持っち来たき食べなー早ぅ元気なるで』　それが元気の元んごつ勝手に決めち　でん嬉しいもん他人でん心ん底から喜んじくるる。『具合が悪いちゅうたなーちった食べるるんな　オカイぅ作ろうか』　自分の事のように心配する。『洗濯物がありゃ出しなー洗うちょくき』

『すまんがちっと貸して』『いいで何ぼいるの』『内緒じ服ぅ買おぅかち思うが』『そりゃ言うちょいたがいいんじゃねぇ』『いいんで買うてんいいち言われちょるき』『そーなほんないいけんど隠し事はせんがいいで』『親が心配すること』『難しいきなえ　何ぼいんの』『３０００円じいいき』『たったえ』　同情もする。

砂糖チット貸しちくれん…なにかヤシボすんの。火焼きぅ焼こぅともぅたらチッタ砂糖いれにゃウモゥネーコト。カキネゴシに話す二人は在所が同じ所じゃき　何でん話すないいが夜の事まじ話しち　男どおし高笑いしたそうな。『お前ゃ元気がよすぐるち言よったど』『嘘ぅ言えヤンドこすー馬力がいいき困るち言よったに』　こりゃまぁ藪蛇じゃつたが　仲のいい証拠じゃろう。垣根越しに。

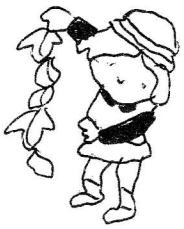
行事　催し　　『村ん狂言』

秋んシノウ前になると決まっち若ぇしが　狂言ぬゆうしよった。チヨコット習ぅち芝居をすりゃ　ケツクシヤユウ出来る。いつじゃつたか山師が木を切り出し来ちょた頃　そげなしに習ぅち着物も作っち本物ん歌舞伎かち思うほづ。義経千本桜なんかそりゃー年寄りしも喜ぅじしもぅち。

『こいさクラブじ狂言があるき夕飯ぅ早ぅ済ましち来ちょくれ』辻じオラビヨルき行かにゃのゃ……仕事た手につかんごたる。女ごしも何べんも手を洗うたり頭ぅ撫でたり　もう落ち着かんき仕事た切り上げた。サカイジュウにゃ中入れに食うもんが出来ち　水筒にゃ焼酎も忘るんなや。

若ぇ青年たちが毎晩稽古したもんじゃろー　美しぅ塗ったおしろいも似合う。娘たちゃやっぱ日ごろん肌が美しいき　おしろいん付きがいい。『あん子はどこん子な』『とんやんかたん子じゃこと』『男ん子かえ』『そーでおしろいを付けちょると分からんなえ』日ごろ見かけん格好じゃもんじゃき　タマガッチシマウ。

『花のおん礼申し上げます』『お前かた花を包んだんな』『ちっとな　がいとは出来んが青年しに』『俺もあんまりゃ出来んがな』『やんどはガイトセニャ嫁ご貰うに丁度いいじゃねーか』『来ちくりゅうか』『好きおうちょるごたるど』『ふんとえーほんな世話わねーかな』　狂言が縁結びにもなっちょる。



星も美しい夜が更けち若いしの芝居は盛会にいよいよ切り狂言。化粧がゆう似合う二人ん心にゃ芝居と　恋心も燃やしながら笑顔がええらしいき　いい夫婦になれるるじゃろう。皆知らんけんど結ばるるんも近ぇごたる。

風習　行事　　『葬儀の風習』

亡くなったし方んイケウチぃ言うち行くこちーなった。物知りんしが二人じ出かくる。山坂ぅ歩いち夕暮れにちーた。これこれ知らせち心尽くしん膳に直る。葬式言う役にゃ必ず膳を出すのが礼儀。

お寺に頼み行く時ゃ米ぅ三合袋に入れち　持っち行く。『あんしがえ若えにえーまあ』　話の上手な相手も貰い泣きしち袋ん米ぅうつしち　寺の連絡も役目が片じいた。

『湯コゥスルキ組んしゃ来ちょくれ』　組の人たちに立ち合うちもらうなー『間違いのー死んじょる　殺されたんじゃねー』　ち言う確認のごたるもん。水に湯をいれたもんじ洗い　それも左手左ヒシャクじかくる。家ん為に家族んたみー働いたけんど　死ぬりゃもう明日は土ん中に埋めらるる。

友引にゃ葬式ぅすると共を呼ぶちゅうち　日延べするしもある。くみうちんしが膳をたてちくるるが　主なしは死人のそばかる離れんじ　膳を運んじもらう最後の膳をする。お膳をたつる家にゃ組ん長老が物言いに出る。故人に代わっちお礼を言い最後の別れ酒ちゅち　飲んじもらう。

米の粉ダンゴは夏痩せせんち子供に配る。柩を出す時にゃ日ごろ使いよった茶碗ぬ落としち割る。二度と帰っちきてん茶碗はねーどと　冷たい扱いんごたるが未練残さんごつ送る　心くばりかんしれん。イケカキは朝かる墓じ穴掘りしちお神酒がでる。イケタ後は土ぅ被せ担げ棒を立てち空気抜きを　次んひに墓直しじ引き脱いで墓の土を盛り上ぐる。土が多いほずくいもんが多いち喜ぶ。

伝承　民話　　『お礼の踊り』

ぽかぽか陽気のある日下界を眺めていた姫が　走っち行く途中じ足を痛めた子供を見つけた。『むげねこされ』じっと見ているとやっと起き上がり流れる血を見ち泣きでえた。優しい姫は番人の隙を見ると下界に下りて来た。『痛いのかわいそう』　川の側にあったフツの葉っぱを揉んじ　傷口につくると安心したんか娘も落ち着き　痛みも止まったごたる。娘は優しい姫を怪訝そうに見つめた。

『心配せんでいいんで天から下りちきたん』　立ち上がった娘はあれほど痛かったのが消えち立ち上がった。『お礼に何ぅしゅうかしら』　姫は踊りが見てーち言う。娘は木の葉や花をつけち手振りも上手に踊っち見せた。あんまりな旨さに見惚れち時の立つのも忘れ　気がつくと日が西ん山に入りかけちょつた。

『もう帰らんと又見せて』『きっと来て』姫は雲を呼んで行ってしもぅた。見送っち家に急いじ帰る途中じ　足がまた痛みでーた。そりゃ一生懸命踊っち見せち足を使うたからじゃつた。それが元で娘は亡くなってしもぅた。天から見ていた姫は自分の責任と思ったが　もう手遅れ。娘も優しく傷の手当てをしてくれた姫の事を胸に抱いて　天国に行ったんじゃろーと。

それからは下界の子供たちが少しでん　元気じ幸せに過ごすごつ守り　病気や怪我がねーごつ痛みも真っ先に　聞き届けちやろう。優しい思いやりの二人ん心にゃ美しい花が咲いたことじゃろう。

伝承　民話　　『育ての親』

娘は片付け掃除ぅヨダキガリモセンジゆうする。そきー旅んしが来た。五助さんかたぅ尋ぬるき『うっとぅ方じゃが』　娘の返事に顔ぅ穴んあくほず見ち『あんたがオミツちゃんかえ』。そりゃー昔イノチキ困っち五助に預けち　上方に行った父親じゃつた。『そうで何か　おとったんに用事な　すぐ帰るき上がっち待って』

小めー時ぃ別れちかるこげー大きぅなっち　すまんこつちゃ。親はおらんでん子はそだつた昔かる　ゆう言うたもんじゃ。そきー五助が帰っち来た。一目見るなりすぐ解っちアブネ気がつかるる所じゃつた。ハゲシューおみつを使いに出えち『あれほず言うちゃつたに　なし帰っちきたんか』『すまんチョイト年ぅ取ったき顔ぅ見とぅなっち　すぐ帰るきコライイ』

『ゲンキジ育ったのんヤンガンお影じゃオオキニ　これじ思い残すこたーねーすぐ戻るきの』『それがいいど折角何も知らんじ来たき　今更親が居るじや気をもむじゃろぅ』『……』『知らん振りがおみつにん幸せじゃろぅき』『ゆう解っちょる　こりゃーおみつん花嫁姿ん足しにでんしちくりー』　親のさいでーた着物包み。

帰らんうちに外に出たら帰っち来たおみつ。『お客さんなえどげえしたん』『うん　もう帰ると　お前に土産ぅくれたど』『ふーん』『のうおみつ……』『どげーしたん』『いんにゃ』『……』『おかしい　おとったん』『あんのぅ　今んしは本当はお前ん親じゃつたんじゃ』『……』『まあ間にあうじゃろぅ　後追いかけち一目ゆっくり合うちきー』『何ぅ言うん　うっとーんとったんな五助じゃこと』『おみつ』『……』『もうあえんかん知れんきの』せき立てられち　おみつは後追いかけるが木影でじっと見る親。出ていいのかこのまま別れるのがいいんか　思案の一時が流るる。実の親子が久しぶりの出会いに育つた　姿を自慢しち親に戻す気持ちになった五助も切なさ悲しさが。

えーと諦める気になっち引き返した所い　親が居た。『おみつーお前』『……』『わしじゃ』『何で今頃帰っちきたん　私の親は五助で』『そうじゃつたのー』『今頃親ちいわれてん　私は五助の子じゃき困るんで』『ゆう解っちょる　すまんじゃつた』『今まじ苦労しち育てちくれたに　親が来たきーち言わるる』

そげなやりとりぅ見ちょつた五助は　『俺にゃ遠慮はいらんきの親じゃ子じゃち思わにゃ　別れちしまうともう会えんど』『……』情が交差して二人はやっぱ親子　互いに手を取り合うち泣きだしちしまぅ。生みの親より育ての親ち昔かる言うが　五助おみつも土産の晴れ着を大事に　暮らしたそうな。

『寺町がつけられた』

戦国ん頃にゃいつでんかつでん戦争があっち　他所から来たしでんここじ戦死しよった。所んしもムゲネーキ懇ろに葬ぅちゃつたきいつんなかめーか　墓がいっぱいでけた。墓ちゅうてん石をおいただけじゃけんど　人の気持ちゃやっぱ嬉しかったんじゃろう。そん近所に庵ぬ作っち庵寿さんもおったごたる。

やんがち寺も出来ち周り一体を寺町ち言うごつなった。そん頃ん権現にゃ家ががいとーあっち町が出来ちょつたき　寺町ぅ権現村ん寺町ち呼ぶごつなった。地蔵谷がのちー埋め立てられち町が広がりやんがち　東側にも古市ち言う町が出来ちそれが　つながっちしもうた。今ん本町ゃそげな昔ん流れかる始まったごたる。

戦争が落ち着き人がゆっくり住むごつなっち　やんがち肥後領になっち加藤清正が治むる時代に。ゆぅなった町筋にゃ井路が出来ち往還も出来ち　ふうゆう皆が暮らせるるごつなった。戦ん犠牲になったしどもを大事にしちゃつたき　ゆうなった世の中じ豊かな日々が過ごせるんかん知れん。

伝説　民話　　『烏の案内』

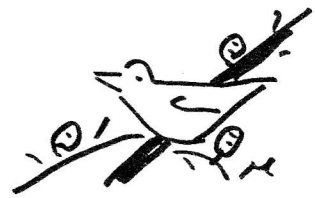
親不孝しちょる若者が山の麓に辿りちーたなー　もう日暮れ近ぇじぶんじゃつた。道くろん小屋じ一夜を明かそう　うとうとしかけた時じゃつた。夢ん中じ烏に散々つつかれた挙句　『親孝行する気があるなら山に登れ』　ち言われた。回りを見回すと東ん空にそそり立つ山　そしち木の上ん烏。

若者は急かさるるごつ烏ん飛んじ行く方向に　腹は減ったが水ぅ飲み草をヤシボしながら。ふっと長い旅の事や親　国の事何かが頭中ぅ飛び回る。『烏おおきに』眺めた烏はどこかに去っちしもうた。えーと登りつめた時白衣の天狗が立つちょる。烏に先導されて目ざめたと告げると　天狗も消えて社があった。

『恵まれたカズラ』

五助は病気ん母を寝かせち雪山に今日も　カズラ引きにでかけた。カズラがいのちきの元手じゃつた。昼少しすげた頃じゃろうかみすぼらしい旅の僧が通りかかる。もう何日も食べちょらんのか疲れた体に五助は今開いたばかりん　粟飯を指し出えた。僧は礼を言うと食べはじめたが　そん横顔にゃもう何年も遍路じゃろー。

食べ残りん分も無理に持たせち小雪の舞う細道ぅ見送る。気になるき坂道ん下まじ行くと　振り返っち『ご恩がえしはでけんが少しカズラを取ってあります　芝を払ってください』　さっきまじカズラ引きしょつた所い来ち芝をはぐった。なんとそきー山と積まれたカズラ　五助は目頭が熱くなっち。ほんの気持ちの粟飯の気持ちが仏か神に通じた報いなのか。小雪は降り続いているが。



伝説　民話　　『桃にまつわる話』

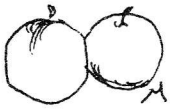
桃はもともと女ごしん思いかる　つけられたごたる。桃とは股や腿から来ちょるち言う説もある。ふっくら膨らじうぶ毛もある。割ると種がなんか想像さするごたる。昔話にも『桃太郎伝説』があっち　桃かる生まれたとか。桃と人の生まれが連造しちょるのも　桃がいかに人間に身近ぇ存在かん知れん。

桃割れ…娘になると割れるからとん言う。割れにゃ困るけんど。桃花粉…ベニオシロイち言う。弓…桃の木じ弓ぅ射ると悪魔退治になるち言う。桃の木にゃ…霊的能力があっち　桃ん葉はアセボにもゆう効く。桃源境…まさにそん極地じゃろう　昔かる羨ましい場所じゃつたごたる。

『親竜んはからい』

宇曾連山にゃ親竜　兄竜　妹竜が住んじょつた。優しぅじ美しい妹竜は人間の憧れん的じゃつた。干ばつん年に雨乞いの幟が立つち祈願ぬしたら　望みの雨がふったき　お礼参りんしが登っち来た。どうしてん一番近ぇ山にがいと一来たに比べち　親竜　兄竜ん山にゃ少なかった。妹竜ん山が近かったき。

兄竜ん機嫌が悪ぅなっちしもぅた。兄妹ん仲が悪ぅなるぬ心配した親竜は　妹竜ん山にゃ女ごしん登るんぬ一止めるこち一した。そりゅう聞いた人間たちは　自分たちの勝手じ迷惑かけたち　お礼参りは平等にするごつなった。それかるは彼岸の中日だけ行くごつなったち言う。



伝承　民話　　『道をふさいだ竜』

月参りち言うち毎月お参りしちょるしが　酒に酔いつぶれち月参りが一日遅れた。重い足ぅ引きずりながら山道ぅ登ると　目の前に大蛇が現れちどうしてん進むことが出けん。一日遅れに神様が怒ったに違いみねえ　悪かったこつー反省しち『これからは禁酒する』と　大声じおらんじ大蛇を飛び越えた。

恐る恐る後振り返るとそこには松の枯れ木　やはり神様が心の試しをしたのだと　それ以来男は酒を断ち真剣に働いた。家族も無病息災に過ごしちいつまでも幸せじゃつた。決めた事を裏切るようじゃ　人生の落後者じゃろうがそれに早ぅ気づいち　改めたのん偉ぇ事じゃち思うが。

『継子の洗たく』

雪が止んじ久しぶりん天気になつた。洗たくするにゃもつちこいん日じゃ　そりー継子ん分なこげん日が子供ぅツンムカルル。義母の言いそうな言葉じゃが　やっぱ自分がん子供ん方がむげねーき。先に自分がん子供ぬ洗い　継子ぬー洗ぉうち思うたら急に雨になった。自分がん子供にゃ着する物があるき　そりー継子なー脱がせんじゃつたきフガヨカッタ。

トコロガ悪いこちー雨が続いち洗濯物が乾かん。着たままん継子は汚れはひじいが何とか過ごせる。自分がん子は着替えがのうなっち　継子の着物を着せるこちーなった。今まじ着たこともねぇ汚れ匂いのする着物　クジぅ言い文句が出るが仕方ねえ。そん子が病気になっち死んでしまった。継子を苛めた祟りじゃち言うが　アコギネーコツーシタばっかりに。それからは大事に継子も育てたき元気な　家族が揃うたそうな。

伝説　民話　　『浅内うなぎ』

浅内に長者屋敷があっち回りに谷が幾つもあった。そきー大けなウナギが住んじょつた。昼寝しちょつたら人間に捕まえられち野津原い連れちいかれた。ほかんウナギが泣きながら見送ると『そげぇ心配するなちょいと背中ぅあぶり行くんじゃ』　ち言うち安心させた。さばかれち炭じ焼かれちまっ黒い煙り　そん間に黒雲が出ちそん周りぅ包んじしもぅた。そしちウナギは消えた。

次ん日浅内ん谷い背中ん白いウナギが　泳ぎよったがどうでん昨日焼かれかかったウナギじゃつたんじゃろー。それかるこっち浅内んウナギはだれん　捕らんごつなったそーな。

『大根と子守歌』

まっ暗ぅなっち子供にゃ足のしもやけが痛むけんど　山ん仕事しよる家族はなかなか子供引き取っちゃくれん。泣き声につられち涙がこぼるる。竹山ん側まじ来ると大根が積まれちょる。ひもじいもんじゃき子供ん手は　大根に延びちしもうた。歯にしみる大根の冷たさと甘さ　そりゃ明日城に納むるもんじゃつた。

ふっと気がちいたら目の前に白い雲　そしち老人が『今食べた大根な明日城に納むるもん一本足らんと庄屋がどげー迷惑するか』と言われち自分にかいった。まっ赤ん顔じ…『今度だけゃ親孝行に免じち許しちやろう』　すっと消えた宇曾山の彼方。子供を親に渡すと急いじ大根の所まじ来た。

庄屋さんな足りんごつなった大根ぬ洗いよる。『すみません　そりゃウチが』『いやいや宇曾さんが欲しいち言うたんじの』　言われち子供は嬉しくち涙がこぼれた。『子守も辛かろうが大きぅなつたら苦労が役にたつ』　二人を照らした月に笹の雪が落ちち子守歌んごたった。

農村生活　作業　　『あんた危ねえで』

山の下刈りに入ると足跡が解るんか　山鳥が羽音をユサブッチ側まじ来ると舞おりた。なんかしゃべりてーごたる仕種に　じっと見るとチョコンと距離を置いち見上ぐる。なんとんエーラシイ姿に足を止むると　またピッと飛んじ距離ぅ置いた。歩くとまるじツイチ来るごつ飛んじ側まじ近づく。

もうやんがち5年になるかん知れん。長ぇ尾っぽが美しいき雄じゃけんど　卵をかいわらかす時になりゃ来んごつなる。どうでん卵をウムシヨルごたる　そん間は雌がえさを捜しち交替じ雛を待つんじゃろう。『あんた危ねえで』　側まじ来た山鳥とは顔なじみだけに　毎年出会うのが楽しみでんある。声をかけたら解ったんか『しょわーねーあんたなら』　と言いたげな素振りが嬉しい。

小屋に繋がれち時にゃ　　『牛の目に写った草』
外の草も食いたかろう。
牛の目に写った草が茂りだしたきチット切っちくるか。田のクロじ風に靡いち待つちょるごたるんを　コサグリ切ると大いいにしち牛屋に投げやった。横になっちょつた牛がムックリ起き上がると　長えベロを出えち口に巻きくうだ。歯ごたえの噛む音が気持ちいい。

頑張っち子牛をゆう生んじくるるき　ちっとでんゆう飼わにゃ銭が敵の世の中。牛もそりゅう承知じ二度噛みしながら　大けん目じじっと見ちょる。そん心ん中じゃ『草がうまかったで』　と囁いちょるごたる。一つ屋根ん下じ暮らす人間と牛じゃが　心が通いあう時にゃ世話しただけん見返りもあるごたる。人間の自由にしかならん牛　そげな運命じゃき尚更気持ちぅ解っちゃらんとムゲネーき。
だったような時にゃチット実物ぅ食わする。それだけん事が畜生でんチャント解っちょるき。

農村の四季　　『夫のいたわり』

霜柱が朝日に溶けち学校に行く道がじるーなる。両側ん草ん上をよっち歩くが泥ばねが気になる。元旦の式にゃ袴をはいた生徒が村の偉ぇしが着飾っち講堂に入る。奉安殿かる移さるる写真ぬ白い手袋の校長が　立ち止まった生徒の間を歩くと　アメ靴ぅ履いた子でん靴下がねーき足が冷てえ。

『もう済むごたるなー』『エート済むが今年ゃ俵が足らんじ』『ゆう出来たじゃろー』『やー』大声じ笑う親父のひげ面がひさしぶりに明りい。勿論小作に出えち不合も多いじゃろうが。

『シャクシナん漬けたんとトーイモじゃけんど』　気の毒そうにコビルを出した嫁に『どこでん一緒じゃ気にせんじいいで』　声をかけちくれた老人にほっとする。

小作も無事納めち村の辻まじ帰っち来た若夫婦　茶店ん前じ顔見合わせたが立ち寄っち　日頃味わえん物ぅ頼んだ。化粧もせん若い肌が荒れち可哀相ち思うが　思いの儘にならん今年も節期が来る。元気にしちょりゃいい事もあるじゃろう　と自分に言い聞かせちベンセンキ下ん米じ食いつなぐ。

家族もあんまり言いごとんねーサカシけりゃ　時代も変わっち行くじゃろうき。今ん幸せぅ大事に俵ん不足した今年ん実入りゅ踏み台に　来年な売るる米ぅガイト作ろう。仄かん夢ぅ結ぶと笑顔もこぼれそうな。若嫁の横顔がなんとん言えん美しいなー　チッタ欲目かん知れんが。

農村の四季　　命の糧

庭ん先んサエンに何かかんか植わっちょる。ゴボーは真剣土ん中じ育つき『しっかり安定ち言う』。大根どきにゃ医者知らずち言いよった　柿が熟るると赤ぅなると医者が青ぅなるちも言いよった。それだけ元気の元かん知れん。ドイモはヌキート体ニ■いいき冷とぅなったら　ぬくめち食べなーち言う。保温効果があるらしいが他ん野菜と煮ちくうと効果があがるらしい。

レンコンな見通しがいいき平和ち言う。これも土ん中じ太るもんじゃき体にいいごたる。土ん中じ育つたもんと土ん上じ育つたもんぬ　混ぜち食うなー一番いいんと。ゆうしたもんじ春から夏に取るるもんな　食うてん何か涼しぅ感ずるなーキュウリ　ソバなんか。こんだ秋かる冬んもんな温いき寒い時にゃ　持って来いじゃな。イモ　ダイコン。じゃき冬は根菜　夏は地上菜ち言うそうな。

配給が統制ん頃は食いとうでん中々ねーもんじゃき　カンネを堀つち食うたりしたもんじゃが　あれも結果うまかった。やっぱ考えちみりゃー春から夏は地上ん野菜を　秋から冬は地の中ん物ぅ食いよったごたる。正月にゆう使うのん■こげな因縁かる使うんじゃろぅ。それでんサカシュウジ風邪もヤラトヒカン　子供ん頃かるヒュラヒューラ飛んでんじょうおるき　サカシイんじゃろう。

昔かる食うち来たもんにゃ何一つ悪いもんなねー。ギシギシ　サトガラ　アマネ　クワイチゴ　椿ん花ん蜜吸うたり　トーマメぅチギッチ食う。大けん子んするぬ見ちゃ真似しよるが　こんめー■子ン面倒もゆう見るき　時にゃコナサレテン泣きじゃくってんツイチ歩く。そんかわりヒョイト他所ん者がコナスと敵うっちくるるき。あん頃ん子供は伸び伸びしちょつたごたるなー。

農村の四季　『お仏飯のご褒美』

『お仏飯あげちきなー』『うん』孫は素直に手をさい出して手塩サラに　ついだお仏飯を運ぶ。夜は暗いからきらうけんど朝がたにゃ明りいき　鐘を鳴らしち供えたごたる。手についた飯粒を差し出えち『これどげーしゅうか』『お前んご褒美じゃき食べなー』『食うてんいい』『いいとんゆう事ぅ聞いた褒美じゃこと』

夕方になっち孫が『お仏飯さげてんいい』『いいけんど　どけーしたん』『ご褒美くるるきー』『……』　孫が仏壇からさげたら『食うてんいいな』『そりゅう食いてーきか』『今朝食うたらうまかったき』　半ば固くなったお仏飯を手塩サラから取ると　口に入れた孫。子供心にも仏に近づいた気持ちがするのか。毎朝供える仏の前に母親が気を利かせて　好きな菓子を供えてあった。

『初参り餅を牛馬に』

正月の初参りに餅を供えち前に供えた餅を受ける。そげな習わしがある今年も牛馬に食べさするき　下げち貰ぅち帰った。コンモゥクズスと　ダノモンの中ぇ入れちやる。舌ん先に当たったんか口に運びくぅじモグモグやりでえた。ヤッパウメーナー解るんか目を細めち　嬉しいごたる。ゆぅ働いちくるるきムゲネー大事にせにゃ罰が当たる。そりゅぅ解るんかじっと顔を見る。

二十日正月にゃ鞭焼きぅしちシコーシチョカニャ。女子竹ぅ切っちヒックギルとウラサキぅ焼いた。まっ黒ぅなったけんどご利益がありそうじ　牛馬も怪我ぅせんじ済む。やっぱムゲネーキナェ家ん者んと一緒じゃき　ゆぅ働くわな。少ねぇ草をチットデン刻みくぅじ食わする　そん気持ちが通ずるんじゃろうな。二度がみする顎に流ぅるよだれが朝日に光った。

『ホンチットージャケンド　オマエドー食え』　大けな子供がオトシかる出えち　小めぇ子供にやる。喧嘩もするが他所んもんかるコナサルルと　皆じカバゥチャル。ジャモンジ大けん子供ぅ尊敬しち見よぅ見真似じ　何でん覚ゆる。山　川　遊び　喧嘩　友達なんでん実習しながら　勉強しち覚えたもんじゃ。

薪もん取り行くき皆集まりゃ大けん子供が連れち行く。小めー子がチンドラカテーナッチ　集めよると大けん子が側に来ち『こんげ出せ　やんな下手じゃのー』クジジャネー　そげな一言が小めぇ子にゃ刺激になっち　ハリコムゴッナル。そしち大けん子供に感謝する気持ちと　自分も人の為にする気持ちを養う。

弁当を開いたら『日の丸弁当』が多い。中にゃ味噌漬がグルリン麦飯ぅ茶色に染めち　匂いがぷーんと鼻をちーた。竹の皮に包んじ来たしは品よう握っちょる。誰が握ったんか『お結び』ち言うが丸　三角　俵の形が多いごたる。ニギリ飯とん言うが本当は『お結び』が正しいそうな。

『子守が出来んごつ悪いんな』『ちっとヤゼンカル熱が出ちの』『俺が子守しちゃるわな』『やんがゃいいんか　オトッタンに怒らるりゃせんか』『しょわーねーき言うち来たき』『そーか済まんのや』　近所ん子が子守が出来んらしいき　加勢しちゃる。おたげーに助け合う子供の頃から自然育った優しい心。

『お前に好いちょるち』『馬鹿ぅゆうなのや』　娘は恥ずかしさにウツミーチシモウタガ　子供の世界にも恋がある。隣近所でん人は好きになり好かるる事も。あれこれ体験と実習じ伸び伸びした子たちが　ヤンガチ大人ん世界に巣立つ。素朴じ純真じキラキラ輝く目は美しい。

農村の四季　『雨に濡れた田植え』

せせらぎにヘロヘロ蛙が鳴きよる雨を喜ぶごつ。バツチョロ笠に蓑を着ち濡れショボクッチ田植えがハカドル。畦豆ん芽を切らんごつ苗を運ぶと田のアンゲコンゲに　投げち配る。植えよるそべー苗がボチャン泥水ぅはねかくる。イモジん先ゃ泥まみれ男しんヘコも泥ビイチョル。苗かるヒーロが飛んじ足にヒルが吸いちいた。

『コビリーシチョクレ』タンサン餅ぅアゲジョウケに入れち来る。夜なび炊いたんじゃろうショウケん縞がついちょる。ツバクロが忙しぅ虫を追いまわしちゃくわゆる。塩口にゃワラビ　タケノコが握り飯にゃ梅干しが入っちょる。泥手をサブサブとウチアロウチ手をサイデータら皆白い手が揃うた　揃うた。

男しは立ったままバリバリヒルケンド　女ごしゃそうわいくめーき　隅ん方にシャゴージ若い娘はコラエチョルゴタル。水番かる帰ったジイサン『デーフー植えたのー』数かずえよったが『一枚足らんど』　ゆう見たら道具置いたとこりー狭えのが一枚あった。ゆうオヒツん下になるぐれーな田もあったき。

植え手が多いき尻ぅ追わるる駄使いはカムカム　立ち上がると皆が見ちょるもんじゃき　忙しぅ馬ん尻ぅビッタテーチ田の中ぉ走り回る。そりゅーじっと見つむる娘ん心は頼もしいち弾んじょる。馬と好きなしとが泥田に見せる晴姿に　乙女ん胸は高鳴るんじゃろー。白い肌が泥で一層美しぅひきたつ。

雨が多いき着物が乾かんき草きり籠をオキにかけち　そん上じ干すと朝までにゃ粗乾きする。そりゅう又着ち雨ん田植えは続くき田植えん済んだ頃にゃダッチシモゥチ目ワクボンジ　後ろから見た方がゆう見ゆるごたる。泥落としん入湯はウレシイモンジャツタ。だったなえ。晩な何も出来んでもうせせろしいなー。

農村の四季　　『ばっかり食い』

春田こしらえがエート済んだらこんだ雨が心配になる。麦が熟れち田ごしらえと麦刈りがイチドキ来るき。麦ぅイイクウジ千羽じこぐ　ハジカイーケンド米が出来るまでん大事な食いもんじゃきー。『コイサ魚さぐり行っちくうか』　カンランとタマネギばっかり食いに飽いたか。ダンゴ汁食いながら口ぅ滑らせた。『あぶねーで』本当は取っちきち欲しい　子供に親にそしち自分も魚ぐれーはと欲も覗かせる。

暑いにばっかり食いじゃ身がもたん　解っちゃおるが手元が忙しいと外ん家にも負けとうねえ。麦刈りと田植えと7月まじ　まっ黒ぅなっち働いち病気したんじゃ何にもならん。添い寝した夫の労り言葉にホロリしち『若ぇ時ん苦労は買うちでんせにゃ』　ち心にもねえ言葉が出てしもぅた。

里から頼まれたち塩鯖が送られち来た。自分たちは辛抱してでん送っちくれたんじゃろう。もう白い物が多くなった両親の顔が目に浮かぶ『いつもすまんのや』　今はお返しもでけん暮らしに涙浮かべた夫は『元気な間に恩返しせにゃ』　と親に聞こえがしに言うと田に出ち行く。

バッカリ食いの今日も暑いのがふりかかる。家族がサカシケリャいい事もあるじゃろう。家ん仕事もしちくるる年寄りも　外じ働く若えしも子供も…やんがち来るじゃろう楽しいイノチキぅ夢見ち。腰ぅかかめち義母がハスイモ　カンランぬ持っち帰った。『田植えが済んだら入湯に行くがいい』『わしどうはいいき　お前どぅ遊び行つっちくりゃいい』　両親の言葉の裏側にゃ長いバッカリ食いは自分たちまで終わりにち　思った繰り返しんようじゃつた。

農村の四季　　『万年暦』

『わからん事がありゃあんぢいさんに聞くといい　何でんゆう知っちょるき』『そーな髭どま生やしちょるきオジーけんどショワーネーナエ』『ヤンナ見かけじ者ぅ計ると損ぬすると』　見かけによらん優しいところもあっち　皆かる相談も受くる。今じゃイツンナカメーカ万年暦ち言う。

『ハルオビが調子がわりーが』『カラヒキが言うこつー聞かんき困る』『ダイズカスちっとー貸してな』『セマチ直し加勢しちくれんな』　なんでんかでん言うちくるが　『いいど』　ち二つ返事じ知恵ぅ貸しちくるる。今んうちー誰か覚えち跡取りぅせにゃ。老人が言うもんじゃき若ぇしがセワシガル。

『たきもんぶげん』

『やんどかたおとろしゅ薪もんぬ積みあげたのー』『今年ゃ向かぅ山ぬ切ったきガイト出来たど』『嫁ぐ貰うじゃねーんか』『またケツロク言う　おれどーかて来てがあるか』『そげんこたーねーど若ぇ者ぁゆー働くし男前じゃし』『そりゃ俺に似ちょるきのー』『へよお前よりでーぶん男前じゃ』

薪もんがよきー積んじゃら家ん中がいいき　ブゲンシャち言うち嫁ご相手が安心しち帰ったもんじゃ。薪もんの新しいなーフスボルバッカリじ燃えんき。娘が苦労するかるん言い出えた事じゃが　心ん準備常日頃ん心がけん現れじゃろう。薪もんぬ晩方婿じょうが運ぶぬーチョコチョコと　後ろかるついち行く嫁ごはまだ若ぇ。

『無理ぅすんなや』『はい』素直に答えて顔見合わせた若嫁ご。色白の横顔に仕事じシビイタカ　ミミドバレん筋が一本おかく赤ぅ走っちょる。それが又可愛いいけんど。

祝言に呼ばれちいいくれー酒ぅごっそんなった。『何やもういぬるや何かイネち言うたんか』『そうじゃねーがもう夜があくるど』『それがどげーしたんか　草きりでん行くち言うんか』『お前ゃ本当に癖がわりーのー』『親に言え俺ゃ親ん子じゃきの』『わかったもういい』　祝言に呼ばるるとどこでん　こげんしが居る。そしち夜があくるまじ飲ぅじ　お土産もそこらじゅうにばら撒いち。どうかすりゃ他所んかたんカベナシ寝ちょる。

嫁ごに来た娘は朝かる気が張っちょるが　眠たい目を見開ぇち酔ぅた親戚んしどーが　喧嘩せにゃいいがち気が気じゃねー。夜があくるともうここん者じゃき　朝飯んシコーせにゃならん。何ぅしちいいか分からんじ婿じょうは　鼻いびきかいち寝ちょる。一番頼りにするしがこげんふぅじゃ　思いやらるる。いいこちーアリツケバアサンが顔ぅ出えた。『ゆうべはどげんふうじゃつた』　責任があるき聞くと『そげんことどころじゃねー』　泣きてーごたる。

そげんこつーもあったが　ゆうしたもんじ日がたちゃ婿じょうん後ぅちーち回る。『仲いいのー』　時にゃ冷やかされたりセガワレタリ。昔かる『三年子なきは去る』　ち言う。子供が三年も出来んと　『どうでん子供ぁ生みきらんのじゅろう』　ち帰らせらるる女ごしが多い。

どっちに責任があるんかしれんが　ムゲネー理屈じ泣く泣く帰るしもあつた。が縁がありゃ弟を子供にしち跡取りにしたり。女ごしがいつも辛い思いをするけんど　世間体か見えか。折角結ばれたにち『また良いところがあるじゃろうきな』　物言いに来たしに励ます別れも。不思議な人生の巡り合わせか運命か。

『ちょいと止めちくれん』『止めきらんの』　嫁と姑との言葉んやりとり。わしの娘なら『どう貸しちみなー　そっちは』　ちきっと言うじゃろーに。自分本位に考えたらそげーなるじゃろー。でん嫁になった場合の思い考え方は　時と場合じゃ違うもん。ここで手を出しすぐるのがいいんか　本人の為にと思う心。

冷たいと理解するか愛情故の言葉か　受け止め方言葉のイントネーション。姑にしちみりゃ嫁ごじゃき冷とう『こんくれんことが出来んごつなった』　と思うか　あんまり手をだすよりも自分ですることで　体調の整えに役立つとするか。『出来るだけ自分じするのが手の運動になるんで』　と説明するんがいいか。

『こりゅうしちくれんな』　そん時手が離されんき『あとじな』と返事ぅする。きりがついたら応じる気持ちはあるのに　ほんの言葉ひとつが反対に解さるる。『はい』　と言っておけば　あとでもよかった訳だが。『ちょいと待つちくんな』　でもだいぶ心が通じたじゃろーが。

『あんたもかたるじゃろぅ』　本当は気がすすまんけんど無理に言わるると『いいえ』　とも言えんきつい『はい』　ち言うちしまう。あとじ『しもぅた返事せにゃよかった』　ち言うてんもう遅いこつ。『ハイ』『イイエ』　んどんくれー難しいこつか。はっきり言う勇気と決断と自分の意志がほしいもんじゃ。

ボタンが止められち『すまんなー手先がちっと』　と言いかけた言葉を押さえち『年寄ると仕方ねえが気をつけてな』　そん一言が嫁と姑の心ぅ温ぅ結びつけた。『そっちは止まったんな』『こっちはいいき』　顔見合わせた笑顔が朝の幸せ風に変身した。嫁と姑たぁまあこげんこつじゃろうなえ。

生活　　『生めかしい会話』

『もうずーっとしちょらんに』『そげーしちょらんのムゲネコサレ』　村の辻じ若え二人が話よる。『若ぇ時ゃゆうしたけんど』『そうじゃなー毎晩しよっもんじゃき　又コイサもするんかち　叱られたりしたけんど』『しだすと　晩になると思いでーちなえ』『上んしは早ぅ出るけんど　下ん分ななかなか出らんきなえ』『まぁ出らんな』　ち責きたてらるる。

『はじめちん時は　そん瞬間ぎゅーち握りしめち　嬉しかった』『そーじゃろー　あん時ゃ　目の色が変わちょつたこと』『本当えこげな嬉しいことがあってんいいんじゃろうか　ち』…『しとうでん一人じゃ出来んきなえ』『そしちやっぱ相手がゆうねーとなえ』『そうそう　あんしは　やっぱいいじゃろー』『誰ナ』『うっとうにそりゅー言わすんの』『誰ナ』『あんたん婿じょうじゃことー』『そりゃーまー一番いいに決まっちょるが』

『いつ頃覚えたん』『うっと早かったで　たしか１５の時かな』『へー早かったなぁ　うっとーは１８になっちかる　あんしがセンカ　ちいわれち覚えたんで』『それでん　こん頃は上手になったこと』『どこじ見たん』『こん前ちょいと覗いたら　しよったこと』『あん時ナ』『まつ白い足がむずむずしよったで』『ちゃーゆう見ちょつたな』

『結局だれが一番上手じゃつた』『やっぱ　先生が一番うまいな年季がいっちょるき』『経験がもぬー言うごたるなー』『正月にや皆揃うきするかなー』『あんたかたのを貸しよ　取りいいき』『いいで　絵も美しいきなえ』『ぼちぼち練習しちょかにゃ　負くるかしれんなー　.天の原ぶりさけ見れば春日なる　三笠の山に出でし月かも』

農村の四季　　『子供は風の子』

どげー雪ん降る寒い日でん『子供は外じ遊べ』ち　年寄りしかる言われち外に出る。いっときゃー震えちょるが　すぐ飛び回るき鼻ん先ゃ赤うしちょつてん　サカシイ。元気ゆうつーじこけたり怪我をするけんど　そげんこたー構うちられん。『やり鬼』『陣屋とりこ』『かくれ鬼』　何でん遊びになるき苦わねえ。

ぼちぼち飽いち帰ると寒そうにしちょつた　年寄りも優しぅ迎えちくるる。『ゆう遊んだのー』『何かねえーひもじい』『もうすぐ夕飯じやき辛抱しよ』　草履ぅそこらへんに脱ぎ捨つると　上がりがまちかるピラと飛びあがつち　襞坊主こすったもんじゃき　泣き面になったが　泣くとおこらるるき堪えた。

ぢいさんがそりゅう見ちょつた。『どげーしたんか　うったんじゃろう来ちみよ』　むげねこされち言うと甘ゆるき　来たツブシん傷ん血をネブッチャツタ。顔見合わせた孫ん元気に頷いち……子供は風んこじゃ　泣くな。『わかっちょる』　孫も笑うた。

『二銭の宇曾山参り』

『宇曾山に参るんか』『うん』『ほら二銭やるき行きゃいい』当時の二銭は貧乏な家ん子にゃ似合いの銭。外ん子供たちも一緒に歩いち登る。帰り道まではしっかり持っちょつたが　何を買うか興奮する瞬間。一里玉なら１０個は貰い出す。饅頭なら二つは買える。あれこれ考えてん結局はやっぱ一里ん玉になった。

首にかけた紐で上手に飴の棒を切って丸めて作る。周りにキザラをつけた一里ん玉を作るのをじっと見た　あん日から今日を待った子供心。釘に引っかけちゃ引っ張ると晒飴が白くなる。そんな仕事も見ただけに自分の銭で買う　気持ちの豊かさ。気持ちは空を飛び子供の心を満たしちくれた。

農村の四季　『ばあさんの思いやり』

『腹がへった』トンキョウな声で帰ってきた孫　『ヒモジイナ何かツクッチャローナ』　風邪気味のばあさんは　腰ぅ曲げながら上がり口かる　ドッコイショちおるると　卵ぅ入れた雑炊を炊いちくれた。頭んコメカム貼った頭痛膏がもう何日も貼ったまま。それでん囲炉裏り端じ留守番でん出来る。

梅干しばあさんち言うでんオカシュウネーごつ　皺がよっちょるが何年も苦労しち頑張った顔は　仏様んごつ笑顔が絶えん。親にフトヘナオコラレタ時　『もういい泣くな』　自分が責めらるるごつカボーチくるる。腰が曲がったのん若ぇ頃働いた褒美にしちゃ　あんまりムゲネー褒美。

『魚捕りに行くきシブしちょいて』『や　シブえ』　ヨダキガリもせんじ柿渋んウンスケを抱え出すと　網ぅ渋につけち引き上ぐると　妙な香りがソコラジュウメンに立つ。ユラがガジャガジャ音ぅ立てち　桶ん底ぅコサギマワル。若えもんが楽しみに行くんならヨローチシチャラニャナルメー。

『おばんナバゥ食わんな』『クルルンナ　何のナバナ』『コレジャ何か知らんに』『見せち見な』　時々ナントンシレン　ナバゥ取っちくるしがある。メッテ食うと踊り出す　笑い出す　腹がせくそげんもんもあるき油断なならん。年寄りゃゆう知っちょるき一目見るとすぐ解る。『こりゃーお前食われんで』

折角取りい行ったにームゲネーき『こりゅーやるわな持っち帰んな　テブラジャヒンガ悪かろぅき』『りゃーわしにくるるん』　ばぉさんの心配りに若いしは嬉しかった。『おばん　すまんなえ　こんだ何かもっちくるき』『そげん心配はいらんわな』　年はだてにゃ取らんもん　優しい気配りが人ん心ぅ泣かする。

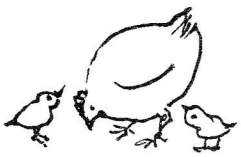
農村の四季　『美しゅうありてぇ』

年頃ん娘が恥じもねー大けな口ぅ開けち話よる。美しゅうなりてぇ気持ちがゆう出ちょる。『オハグロ見た』『いんげ見たこたーねーが』『口ん中じ歯を黒ぅ染めち』『色ん白いしわ特別白ぅ見ゆるなえ』……嫁に来ると歯を黒く染めち嫁ごじゃ……ち皆に知っちもらう。ありゃ虫歯にならんじいいそうな。

歯磨きしたあとじ舌をこさぐのは『舌かき』ち言よった。歯ブラシに鳩目じ止めち　クルット回すと両手じ舌をコサグ。シオを指ん先につけち磨くのん見よつた。虫歯は昔かるあったらしいが　痛ぇ時ゃ街角じ治療するような　時代もあったそうな。娘が虫歯ぉ堪えち赤ぇ顔しちょるなムゲネーコサレ。

ウグイスん糞がゆう効くち塗るしもあったなぇ。馬屋ん肥出しぅすりゃ手がスベスベしよった。盆前になると肥だししち　あんしにじっと肩ぉ抱かれたら　手がスベスベしょつた。やっぱ肥だししたんじゃなーち思うた。美しぅしち好かれてーけんど相手が好いちくれにゃ仕方ねー。でん貰い手はやっぱあるもん結果男前んしに。

『あんた無口じゃき』『そうで無口じゃき６つ口があるき』『そげな意味ん事な』『やかましかろぅがえ』『そじゃけんど理屈がいいき……そりーおとなしゅうなること』『時にゃなー器量は悪いし取る所はねえこと』『女ごは心が優しいんがいいち言うが』『あげぇ言うけんどやっぱ別嬪がいいごたるで』『じゃろーなー』



『皆集まれ大将分けするど』　亥の子まわりぅした子供たちが寒いけんど楽しみんひとつ。長い間順に引き継がれちきた素朴な習わしんひとつ。『お前はこいさはじめちか』『うん』『よしほんな５０円じゃきの』『……』無口じ　それでんはじめち手にする銭にゃ温けー温もりが伝わるごたる。

『火の用心』通り堂ん子供たちゃ冬になると　毎晩拍子木ぅ叩ぇち歩く。もう長ぇ習わしぅ守っち来たき火事もねえ　門内にゃ大人がコンメー頃かる回っちょつた。側ん秋葉山にゃ秋葉様を祭るき火事かる守っちくるるんじゃろーが　子供が火回りするぬームゲネーチ思うちくるるんかん知れん。

『よーい早ぅきーオートサンリンが来たごたるど　バタバタ音がしでーたき』そん頃は珍しいオート三輪車　時時通ると音ぅ聞いち学校から飛び出えち見よつたき　ネンブチじ叩かれた。そんネンブチは自分が持っちきたのじゃき。『やんなハジカか　ツツロクさげちょるのー』『ハジカじゃき下ぐると早ぅゆうなるち言われたき』ハジカが流行すると南天の軸じツツロクぅ作り　ドンノクビに紐じつけち魔除けにした。

『ワクドがかいわれたど』　オタマジャクシかるワクドになると水溜りん北べらかる　這い上がるち言う。なしか『そりゃ北べらにゃに陽がゆうあたるき　温いからじゃろーが』『へーえそげんこつぅあるんか』『そーとん陽がゆう当たる北べらかる上がっち自分がん好きな所りぃ行くんじゃ』

『針がのうなったきとげ』『竹ん先ぅぐあいぅトイジ蓄音機に使うんな』『そぅじねーと針ぅ買いださんき』『しょわーねーんな』『ゆう聞こゆるど見ちょれや』『ふんとじゃゆう聞こゆるわな』

農村の四季　『食生活さまざま』

正月ち使うナマス大根な　メデテーち[redacted]言いよった。白ナマス紅ナマス　そりゅー見ただげでん美しぅじ平和じゃけんじゃろー。

春になりゃ　ワラビ　ぜんまい　竹のこが出回る。山に行きゃなんぼでんあるが　根こそぎにゃ取らんき頭ぅムシツテン　来年にゃまた芽を出ぇちくるる。お接待ん混ぜ飯にゃかがせんもん。ヘギについだ混ぜ飯が　年寄れしが孫ん手を引いちくると『はい二人分ぬあぐるぜ』　ちくるる。なんとん言えん春ん香りが立つなー食い気も　せりたてちくるる。

夏にゃニナ　タニシ　シジミ貝が取るる。暑いさかり　だっちしもうち痩せひこけてん　ウナギ　タニシぅ食うと元気ぅ出えち　サカシュウナル。息子も元気ぅ出ぇち朝方見りゃホエチョル。どげぇかしゅうち思うたら　もう草きり行ったんか寝床はカラッポ。しもうた事ぅした大けん損ぬしたもんじゃ。

ナツケが出来たところ麦ん煮割が多ぅなった。バッカリ食いも仕方ねーけんど　山ん仕事ちクラガイ弁当に一升飯ぅサゼクージ　馬ん鞍ェブラサゲタ。

サトウは病人の食うもんじゃき　とてん普通んしゃ食えん。普通んしの甘みは干し柿か蜜蜂ん蜜ぐれー。水飴ぅチョコット作るしもあったが　やんがちイチリダマになつち売るごつなった。ゆう首い紐ぅ下げち飴ぅ上手にチョキンチョキンち　切っちゃ丸めよったぬ見ちょると　『お前どう買いに来いや』　ちコンメーぬ一つくれた。四季の自然のもぬー使ぅちイノチキぅしたのん生活ん知恵じゃつたんじゃろぅ。銭が取れんじゃったぎ辛抱したんのん　ゆう解る。ダチンウーセやら馬車引きんしわ　がいと稼ぎよったが。

村の辻　町かどロマン　『オシャベリ会話』

『ヤゼンナお馳走んなったなー』『アゲンコトンジョー』『トワズンジョウユゥチナエ』『手拭いベッピンじゃき　ゆう似合うで』『すかんたらしーそげんこつー言わるるとハジカイーがえ』『セセロシカローナー』『ウソンカワジャネーケンド』　話が弾むもんじゃき　ケジメクセーのが解らん。

『何か匂わん』『なんがえ　夕べのが染みついちょるんじゃねーの』『スカンタラシー事ぅ言うなーそげー出来んでウットドーは』『うっとどーは毎晩でんいいが』『マエカケ別嬪じゃき通ぅちくるしがあんのじゃろー』『そげんもんなおらんでん　手持ちじ間に合ぅちょるがえ』『隣ん麦飯ほうがウメーンジャネー』『ソリャエギーワナ　ソリー腹がオクルきオオゴツ創りたつる』『そりゃまーそぅじゃな　すぐ目立つきなぇ』

蜂ぃさされちクラガイ頭になっち痛えなんちゃねぇ』『おまけに山桜ときちょる』『なんなそん山桜は』『花より《鼻》より葉が先に《歯》出るキーじゃこと』『うっとどぅどけーする　前はせり出えち後ろも真剣出ちょるき梯子がかかる』『でぇぶん使われたきなぇ　好きなほうじゃき』『悪い悪いち言うけんどせんと悪いんじゃねー』『イビショコネーコツー言わんで』

『どうでん何かフスボリヨルごたるで』『ありゃさっきんクドん火がコキー入っちょち焦げよる』『まぁー知らんじゃった　ふがよかったなー官山に入らんじ』『官山たなんな』『あっこじゃこと』『えーあっこえ　そりゃ火が入いりゃ蜂ん巣をつついたごつ大事ぃなるなー』『焼肉が出来るんじゃねー』『誰か食ぉーか』『食うがえ一番に世話になった旦那が』『りゃーどげーしゅうか』『何とかの刺身に何とかの酢あえ　さぁさお上がり腹の上ち　歌うこと』

夢とロマンの街道　　『ツツジの芳気』

宇曾山のツツジの芳香は子供の発育に効果があるとか。三浦半島にも源頼朝が手植えしたツツジの下を潜ると　頭痛がよくなるとか人間との関わりがあるようだ。宇曾山は標高が約６６０米だから人間の生存には理想的な高度と言う。天狗が修行する場所と子供の護身の技を取得した　霊験は自然の中から生まれたのかもしれない。

高貴な人たちが高台に居を構えるのも　敵の攻略から守るだけでなく安定した体調の維持も含まれているのか。避暑地や別荘がこんな場所を選ぶのも生活の知恵かもしれない。ツツジが多く春の新芽時期に祭りを　秋の新鮮な空気に祭りを　それも国民の多くが馴染む季節感覚の時を選ぶ　心にくい選定でもある。

『惚れ地蔵あれこれ』

惚れた人にそつと削った灰をかけると望みが叶うとか　乙女が胸に抱くやるせなさを解ってくれるのか。でも見方によると道祖神のようにもあり　人の迷いを助ける道知るべの役も果たしてくれたのか。座のあたりから幅広く立ち上がる姿は男根にも類似する。が見方によると女性のシンボルにも程近いから争えない。

根元がしっかりしているから逞しい男らしさがある反面　慈悲に満ちたような優しさと柔らかな姿体はまさに女性。削り取る事で我を助けてほしいと願う乙女の　切なさと意地らしい思いは一人地蔵だけが知っているのだろう。古くは歯が痛む時に願かけしたら治ったとも聞くから　諸々の諸病から守ってくれた神か仏か。

夢に現れるような素朴な鑿の跡が残る仏像には　人の幸せを念じていつも黙って見守るのだろう。故郷の人たちが欠かさず香をたむける所作に　きっと御利益を施しながら。

街道馬子歌　街道の旅　『嫌いな人はいない話』

『お客さん眺めがいいじゃろーがえ』『いいなー眠とぅなるごたるき　なんか面白い話はねーな』『あるで話そうかな』　お客にせきたてらるるまんま馬子ん五助は話でーた。人ん悪い口なら好かんじゃろーが　五助ん話にゃ灰汁がねーきオモシリー。

朝方早ぅ近所ん後家さんが戸を叩く　荷物運びかち思うたらザルぃフダンソウを一杯。血の少ねぇしが食うと増ゆるち言うき　気を利かせち持っち来たんじゃろー。『そげー増ゆるんな』『とてん若え娘どまゆう効くで』『それがチンタツグサんことな』　お客もまんだら知らんこたーねーごたる。

『そりゃーまた違うんじゃ　ニラちゅうちな　ちったー匂うけんどそりゃーヒトメンで』『そげーえ』『毎晩食いよるとオツトメが訳きゃねーき相手が悦ぶわな』『へーちっと食うちみてーな』　客ん目が冴えちしもぅた。『あんなーニラだけじゅねー　ニンニクもノビルもいいで』　面白い話んはずがちょいと色気話になった。

昔かる滋養にもなりよったき病気でんすりゃ　もうオカユかニラゾウスイ　卵でん入るりゃすぐゆうなりよった。『今朝ん話しゃどげーなったん』『あれな　昼脇になったらこんだノビル摘んじ来たき　コイサ無心ぬ言うんか』『無心ちゃなんな』『わしぃ言わするんな』『ここまじ話ち言わんと罪なるで』

『ムドガッチモライテーンと』『それじ来たんな』『ニラを貰ぅたち来たき他に用事があんのじゃねーんなち言うたら』『ふんそれじ』『一遍じいいき食べさせちくれんな』『……』　お客は乗り出さんばかりじ次ん言葉を待つ。『あんたん作った雑炊はうめーきち聞いたき　昨日からどぅも飯が喉ぅ通らんき』　五助は雑炊炊きん名人じゃったそうな。

街道夢とロマン　『古い歴史の跡』

上詰で刀剣が作られちょつたち言うなぁでーぶん昔んこと。そん頃砂鉄かる鉄ぅ取る『たたら製鉄』ち言う　方法が取り入れられちょつたんじゃなかろーか。記録に残っちょるとこるー見ると　先人の知恵者がそげなこつー研究しよった。考えちみりゃ頭んいいしがおったんじゃろぅき。

竹の内じ瓦を作りよった頃もあった。どうでん土が悪かったんかヤンガチ止めたごたるき　瓦にゃちっと無理じゃつたんじゃろー。そりーしてんフガユー出来ちょりゃ今頃ぁ　たいしたブゲンシャになつちょつたかん知れん。柿のん坂にハンゴイシがあるが　柔らこうじ細工が出来るが乾くとボロボロになる。

太田にゃ鋳物師釜ち言う所がある。繁美城があったすぐ側じゃきヒョイトスリャ　武器なんかんツクロイやら鉄ん修理ぅ　しよったかん知れん。名前がええらしいき親しみが湧いち　行っち見とぅなるが今は田んぼじ周りにゃ山もある。側にゃ大井手もあっち山苺がゆうあった。蛇なんか追い払ぅち苺取りん女ごしが見られた。

山峰　太田　平野にゃ弘法大師ん８８ヶ所が作られちょる。周りん地形をゆう使うち８８体ん大師が路座しちょる。信心の現われか人ん心に大師を迎ゆる純真な気持ちが　そんな知恵と場所を創ったんじゃろぅ。何かに縋る思いが形になる崇高な思いが　より所として大事に管理されて来たが…最近少し荒れた所も時代の流れか。

西福寺にある１６羅漢尊像は昭和のはじめに　創られた羅漢尊象としては珍しい１６体の仏像。時には怒り時には笑い時には諭す顔から　人の心に人間としての生き方を諭しているように眺められる。特に笑いの表情には人の苦難は誰にもあると　教えてくれるような和やかな心が見られる。

『のろしと順番』

のろしが上がると鶴崎に船が入った知らせ。お陣屋に早ぅ行かにゃちつーじ来る。なんさま早ぅきち順番のいい役にならんと　ひじい罰いあう。一番にくると道案内ち言うち先触れをする。何も持たんじいいきラクなもん。次が小物持ち役　続いち大道具　そしち終りんほうになると籠かつぎ役。坂道でん交替がねーと大事じゃき早ぅこんと損ぬする。

『こんだどげーじゃつた』『こんだ調子がゆうじのー　褒美ももろぅたど』『アワズ言うな　そげーご褒美ぅくるるか』『それでんもろうたきしようがねえど』『何をや』『言わん』『おろいい奴じゃのーチュウレンガ』『ほんな見するわい　見よ』『ありゃーお前ゃアワズじゃねーのー』

『あら麦貰い』

『物貰いがきよるで何かやらにゃ』『それがのーあら麦しかねーちゅうたら　いらんのと』『へー贅沢なー俺どうでん麦飯じゃに』『近ごろぁ横着じゃのや』　物をもらうに　麦はいらんとかあら麦は悪いとか。百姓ん苦労が分からんのじゃろう　とりあうな。人の心ぅ持ち遊ぶような人間な　いいこたーねえわな。

一握りの麦を手塩サラに入れち渡す娘　じっと覗くと老人の可なり疲れた僧。せめて茶でもち腰かけるごと勧めた。軽く頭を下げたそん僧は言葉に甘えて済まんと　言わぬばかりに腰をおろした。娘は茶碗についだお茶を差し出すと　合唱して頂いた。何日も食わずの日があったのでは　痩せた手足に履いた草履もすり切れて。感謝のお札を渡すと『病気した時濡らしてそこに張ってください』　とすーと消えた。優しい親切な娘に仏が褒美をくれたのか。

街道の旅　　『レンゲ畑の囁き』

ピンクの絨毯を敷き詰めたごたる春先　若い二人が連れだっち田のクロじ話よる。いい話が弾むごたるが時折肩を叩いち　嬉しそうな仕種が手に取るごつ解る。娘がしゃがみくうじレンゲん花を摘むと　側じ見ちょるんも困るんか自分も側ぇ座った。日ざしが眩しいごたるが　レンゲん花がそりゅう和らげちくるる。

田んぼん中ぇ入ると大の字になっち　仰向きになったもんじゃき娘は　困ったがゆうしたもんじ雲が被さった。『うっとうも』ち言うとちっと一離れち横になつた。茂ったレンゲに二人ん姿が見えんごつなっち　ありゃあんふたりゃどげーなったんか。心配せんでんいい若ぇしに気を利かせにゃ。

『竹の秋』

竹が太っち竹の子が出けだすと　春先でん土をかむぎあげた下に竹の子。そりゅう育つるたみー親の竹が葉を黄色にしち　枯れ落ち葉になる頃んことち聞いた。旨い言い回しち感心しちょつたら誰でん知っちょるち　言われたがそげー知っちょろうか。竹にゃ人間に尽くしちくるる優しさがあるもんじゃきじゃろう。

風呂わかしん時にシノべん竹の子を　タキグチぃ指しクベチそん火じ焼いち食うたが　けっくしゃうまかった。竹ん皮じ包んだニギリ飯わなんとん言えん味がする。そりー草履を作るババサンの手元にや　ノミトリん竹はさみが置いちゃる。イマキん中かる捕まえたノミぅ挟んじプチンと殺す。

竹ゴマが渦まいちゴンゴンすんじまう。中ぇジミを入るると音がいいち　仏様んジミぅ切っち入れたところ　ヂイサマから怒られた。悪いこつーしたきシヨウガネーケンド。

街道の旅　『横道から運んだ石』

工藤三助の記念碑が立てられち久しいが　こげな大けな石うどこかる運んじ来たんじゃろう。そん頃は機械もなかったし道もゆうはなかった。それでん人間がやる気になりゃ　あげな大けな石でん運んじ来るもんじゃ。大けん人数があつまつち横道ん赤岩ん横かるヨイショヨイショち引っぱっち来たち言う。

みんなずり加勢したき一寸ずりでん　動くにゃ間違いねえ。人間の知恵もあったじゃろうが　みんなが心を力を合わせた気持ちがきっと神に仏に通じたんじゃろう。あげな大けなもんち見上る時そんきになりゃ損得抜きにした人の真心が　そうさせたんじゃろう。タマガルゴタルガ現実にあるからショウガネエワナ。

『辻原をよけた県道』

府内かる肥後に県道が抜くるこちーなった。野津原まじ来た道が辻原に上ろうかち思案しよったところ　辻原んしに知恵をつくるしが居った。『お前どうかてー道が通ると便利はいいが　そん代わり泥棒も通るど　気をつきーや』　聞いちみりゃ理屈が成り立つ　考えちょつたが　相談したらやっぱへちこち通っちもらいてー　意見が出たち言うもんじゃき　柿野ん坂を上るこちーなった。

工事はどっちなってんあんまり変わらんが　道が出来ると困るしと反対に便利が悪いちくじゃ言うしと。結局辻原には道が通らんき泥棒ん心配はねーが　そん分不便じ米出しも牛馬がウーセダス始末になつた。石ゴンツ道をころ米をオセダス馬を見ると　ヒヤヒヤしたもんじゃつたが。

村の辻　　『葬儀の食事制限』

戦争が激しぅなっち食料も厳しぅなったが　それでん田舎じゃ食うなー何とかなった。葬式ん時にゃ米飯が食わるるき　わざわざ参っち直ったもんじゃ。そんうち役場ん方かる達しが出た。『親戚んし以外は食事は出しませんき　協力しちょくれ』　そんな意味ん旗が立てられた。

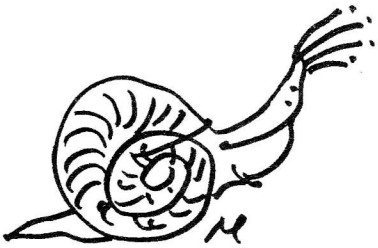
死んだしの最後じゃき腹ひとつ食うちもらいてー　そげな気持ちんしと　しとうでん出来んしの差があってん悪いき。県からんふれならモガエンじゃろう。酒も配給じ一升だけ…そん外ん分なヤリクリしち。まあ今思ゃ死に時もあったじゃろうが　戦争たーそげん事まじせにゃならん　罪作りじゃつた。

★　現在でも当時の旗が保存されている。材質はスフんごたる。

『三角屋敷』

三角じゃき縁起が悪いちとしょれしが言う。たしかに格好は悪いけんど道端じ便利はいいになえ。昔かる三角ん土地ぅ買うと運が悪いち言うたもんじゃが　角は使い前が悪く土地が生かされんき。人が何か悪い事が起こると『見よ三角ん土地じゃき』　ちいいふらす。あっちこっちアブラゲが出来ちよかろうもん。ち負けず言いよると『スモツクレンコツーイウチ』ち　笑われた。

たしかに勿体ねえ土地の不便はあるけんど　三角じゃきち縁起が悪いなんか関係のねえこと。使い道ぅ工面すりゃけっくしゃ都合んいい　場所にもなるごたる。
嫌われる土地を大事にすること
こそ　土地の神に喜ばれるんじゃなかろぅか。物を大事にする
気持ちこそ宝じゃろうに。



夢とロマン　『人間ですもの』

『好きになっていい』　咄嗟に言われちタマガッタが年頃の男女なら　あってん可笑しい事でんねー。お互いが顔見知りじゃけんついつい気づかんままじゃつたんじゃろう。言われちみると相手も自分も　好きと意識はしちょつたごつもある。色白ん優しい娘の心にゃ仄かに恋心ん燃え始めちょるんじゃろう。

野仕事ぅ真剣するち評判もいいき若いしが　後追いするなー当たり前んはずじゃ。にホカンシよりも自分に言うなんち　チョイトタマガッタが　マンダラ悪い気もセンジャツタ。『イイデ俺も好きじやき』　それだけ言うと　あとドゲーシュウカち迷うた。何か待つちょるんじゃ……なかろーかちも。

顔馴染みの二人じゃき妙な噂がたってん困る。男はいいとしてん女は変な格好になっちいくき。ちっと考えち『こいさはもぅ遅いきこんだどこか遊び行くな』『連れて行ってくるる』『いいで　どこがいいな』『……』　娘はあと何も言えない程感涙しちょるごたる。無理もねぇ好きと言われた嬉しさは天にも昇る思いか。

そっと肩ぉ抱き寄せち頬を寄すると　女の髪の香りが男心を刺激する。『好きよ』『……』二人ん気持ちはいつの間にか　夢の国に誘わるるごつ。風が肌に心地ゆう吹くのにも上の空のような悦びが吹き抜ける。『病気せんごつしなーえ』『うん』　言葉少のぅ答た心の中には心妻んごたる感触も。

『もう帰らんと心配するで』『いい　こんままいつまでんおりてえ』『そりゃー悪い　こん次ん事もあるきな　心配さすると壊れてしまうと何にもならんき』『……』　名残りおしそうな娘の心には　男らしい人の気持ちがもう一人占めされたごつ　根をおろしちょつた。若いとはいいなーと虫も嫉妬したように鳴いていた。

街道の旅　夢とロマン　『人の真心』

『すまんけんど加勢しちくれなー』『何ぅえ』『こん紐ぅ結んじくれめーか』『わしにえ』『よだきーな』『よだきーで　よだきーくらびゅすんのでんよだきー』　よっぽずよだきーんじゃろうが。それでん仕方なし　『わしが結んじゃろー　そん代わり背中ん弁当おろしちくんなー』　結んじもろーたき仕方ねー弁当を本当はよだきーが取っちゃつた。『すまんが開けちくんなー』『あんたもでーぶんよだきー方じゃな』『開けたら食うちくんなー』『そりゃ腹ん足しにゃなるめーもん』『腹がおくりゃ又いきとーなること』　人はそげーあってん気が合うたんか　弁当食うちゃつた。

昔かるヨダギクラベち言う民話に残る物語じゃが　いつん世にでん仕事　付き合い　世話にヨダキガルしが多い。じゃけんど人間は正直じ真面目じ悪げがねーき　愛嬌はあつちいいかん知れん。気長じ時の間にゃ合わんかんしれんが　させちみると念入りにするき見直さるる事もある。出過ぐるよりもいいかん知れん。

そげなしに限っち気短かなしとゆう気が合う。それも不思議な出合い。何か言いたげなき『早ぅ言わんか』ちせき立つる。と『そげぇ慌てちどげーするか』『もういい分かった』と早合点するき　損ぬする。『ちょいと待ちなー』忙しく酒肴を運んで来たら　もうそこらこんげにゃおらん。気長えなー腰ぅ据えちよばるる。

『お前んごつ急かすると言いそこなうき言わん』『もういい何が知らんか先に湯にへーるど』『慌てちどげーすんのか下駄ぐれー脱げ』『ゆるーたかそこ板を入れんじ入るきいいんじゃ』『ほんなへコぐれーは』『手拭いの代わりじゃ』『紐がちーちょるにや』『たすきするきいい』　気持ちが嬉しいぐれー解るに無理ぅしち。

村の辻　ロマン　　『生活の周りと気象』

人間生活にゃ天気は重要な役割がある。太陽　水　空気なんかは絶対に欠かされんでーじなもん。

月が笠をかぶると雨になる。梅ん花が下向きに咲くと雨が多い。大霜のあとにゃ雨が来る。

大雪は豊作。ビワの花が多いと麦が豊作。

カラスが泣くと縁起が悪い…黒いかる忌み嫌うらしい。
ツバキん花は縁起が悪い…ポロリ落ちるから　昔の武士が嫌うちょたのん　首切りされる忌みに結びつけた。

トリが入ると運がいいち言う。とりいり…取り入れの意味からか棟上げに雨は　ふりこむから縁起がいいち言う。本当は材料がぬれち傷むかんしれんに。祝言にゃ雨降りは　降っち地が固まるき運がいい　アリツキがいいち言う。

まぐれ犬はいいが　まぐれ猫は悪いち言う…犬は三日飼えば恩を忘れんけんど　猫は恩知らずち言う。可愛がるか反対かでんでーぶん変わるち思うが。動物は主に似るち言う事もあるき。

雨年は野稲　干年はウリガゆう育つ。逆手で農作物を作るならこれまた　作上手ち言うんじゃろうが。草もイノチキ　虫も生き物じゃきなー　人間ももともとかる動物じゃこと。こん頃はそれよりも悪いもんも居るごたるが。牛馬やら犬猫かる笑われよるかん知れんな。考えんといつまでん気取るちょると　ろくなこたーねえー。

ちょいと一服　　『江戸期の一両』

江戸期の一両は…現在に換算して１６万円くらい。
一分は１６分の１＝＝１万円くらい。
★　米　１０キロくらいの価値《当時》
一文…現在の４０円くらい。

一月に１両２分あれば……生活が出来た《１８万円》
食費が７割…８割必要だったよう。
★内職…２００文くらい《８０００円》
★月に１回くらいは外食も出来たよう。

当時……風呂　　８文《３２０円》
うどん　１６文《６４０円》

……平成９年１２月　ＮＨＫの放送から……

『子供とナイフ』

最近の子供はナイフを上手に使えんな。とナイフ文化の退化を心配しちょる矢先　ナイフによる事件　事故が多発するようになっち。小刀文化はいろいろな世相のうねりん中じ　発展してきたに危険ち感ずるとすぐ処理してしまう。昭和３５年に浅沼事件があっちナイフが姿をけしちしまうた。肥後の守じ有名な懐かしいもんも。

子供がナイフじの細工も出来んもんじ　鉛筆も機械の力う借りる事い。物を作り出す知的才能ん開発も　ナイフ文化じ造り出す夢もねえ。恵まれ過げた太平の世じ頭を働かせち　造り出す楽しさなんか影ぅ細めて行くなあ　哀れでんあるごたるなあ。

村の辻　ロマン　　『生活の周りと気象』

人間生活にゃ天気は重要な役割がある。太陽　水　空気なんかは絶対に欠かされんでーじなもん。

月が笠をかぶると雨になる。梅ん花が下向きに咲くと雨が多い。大霜のあとにゃ雨が来る。

大雪は豊作。ビワの花が多いと麦が豊作。

カラスが泣くと縁起が悪い…黒いかる忌み嫌うらしい。
ツバキん花は縁起が悪い…ポロリ落ちるから　昔の武士が嫌うちょたのん　首切りされる忌みに結びつけた。

トリが入ると運がいいち言う。とりいり…取り入れの意味からか棟上げに雨は　ふりこむから縁起がいいち言う。本当は材料がぬれち傷むかんしれんに。祝言にゃ雨降りは　降っち地が固まるき運がいい　アリツキがいいち言う。

まぐれ犬はいいが　まぐれ猫は悪いち言う…犬は三日飼えば恩を忘れんけんど　猫は恩知らずち言う。可愛がるか反対かでんでーぶん変わるち思うが。動物は主に似るち言う事もあるき。

雨年は野稲　干年はウリガゆう育つ。逆手で農作物を作るならこれまた　作上手ち言うんじゃろうが。草もイノチキ　虫も生き物じゃきなー　人間ももともとかる動物じゃこと。こん頃はそれよりも悪いもんも居るごたるが。牛馬やら犬猫かる笑われよるかん知れんな。考えんといつまでん気取るちょると　ろくなこたーねえー。

ちょいと一服　　『江戸期の一両』

江戸期の一両は…現在に換算して１６万円くらい。
一分は１６分の１＝＝１万円くらい。
★　米　１０キロくらいの価値《当時》
一文…現在の４０円くらい。

一月に１両２分あれば……生活が出来た《１８万円》
食費が７割…８割必要だったよう。
★内職…２００文くらい《８０００円》
★月に１回くらいは外食も出来たよう。

当時……風呂　　８文《３２０円》
うどん　１６文《６４０円》

……平成９年１２月　ＮＨＫの放送から……

『子供とナイフ』

最近の子供はナイフを上手に使えんな。とナイフ文化の退化を心配しちょる矢先　ナイフによる事件　事故が多発するようになっち。小刀文化はいろいろな世相のうねりん中じ　発展してきたに危険ち感ずるとすぐ処理してしまう。昭和３５年に浅沼事件があっちナイフが姿をけしちしまうた。肥後の守じ有名な懐かしいもんも。

子供がナイフじの細工も出来んもんじ　鉛筆も機械の力う借りる事い。物を作り出す知的才能ん開発も　ナイフ文化じ造り出す夢もねえ。恵まれ過げた太平の世じ頭を働かせち　造り出す楽しさなんか影ぅ細めて行くなあ　哀れでんあるごたるなあ。

古い唄　新しい歌　　『野津原音頭』…替え歌

東は胡麻鶴　西は詰　サノ西は詰
　　東西三里の野津原村　トサイサイ野津原村
殿様時代の　野津原郷　サノ野津原郷
　　お茶屋の跡や城の馬場　トサイサイ城の馬場
春秋賑わう宇曾山　サノ宇曾山
　　霊験あらたな虫封じ　トサイサイ虫封じ
胃腸によく効く冷泉は　サノ冷泉は
　　湧いて尽きない塚野の地　トサイサイ塚野の地
河鹿の声や蛍かり　サノ蛍かり
　　流れも清き七瀬川　トサイサイ七瀬川
秋葉の山の空高く　サノ空高く
　　功を語る忠魂碑　トサイサイ忠魂碑
広さも富も人口も　サノ人口も
　　郡内一の野津原村　トサイサイ自覚せよ
郷土を愛せよ村人よ　サノ村人よ
　　家業に精出しいそしめよ　トサイサイいそしめよ

※　歌詞は１０番まであったようですが　記録がとれませんでした。戦後の一時期には青年団の盆踊りにも　振りつけされて踊られました。曲は…紅屋の娘…です。

『猿丸太夫』

咲いた桜になで駒つなぐ　駒が勇めば花が散る…桜に化身した若い娘になし側え　駒ぅ繋いんだんじゃろか。駒が元気ぅだしゃそりゃ　いわずと知れたもん。若い男女の中じゃもん　ヒトメンごっなるじゃろうに。それでんいつか花も咲かせにゃ女ですものと。待つちょつたんかん知れんが。

古い唄　新しい歌　　『オサシ唄』

おひとつ落として　オッシャーラ
あふたつ落として　オッシャーラ
　　オチリンコ　オチリンコ
　　落として　オッシャーラ
おー皆そろえて　　オッシャーラ
　　オーテション。

おみつつ落として　オツシャーラ
およっつ落として　オツシャーラ
　　オチリンコ　オチリンコ
　　落として　オッシャーラ
お　皆そろえて　　オッシャーラ。

『愛情子守歌』

チョチ　チョチ　アワワ、オツム　テンテン　ニギニギ
ひとつ笑え　ドングリ眼で　アップンプン。

アンヨガ上手で　ここまでおいで
しゃがんじゃ　だめよ　ほらほらもひとつ　どっこいしょ。

ニラメッコ　シマショ　アッチカル鬼が来た
ニラメッコ　シマショ　コッチカル蛇が来た
ニラメッコ　シマショ　ウントコ　ドッコイショ。

古い唄　新しい歌

野津原賛歌

春はみかんの花が咲き
夏は七瀬の川涼み
夜霧　朝霧　夢の国
蛍が踊れば河鹿が唄う
水の野津原　山の町

夏のお祭り清正公様の
みこし担ぎの凛々しさよ
烏帽子狩衣わらじ履き
馬乗り袴の両ひざからげ
浮かれ太鼓で　西東

秋の賑わうふるさと祭り
四方の山々もみじして
唄に踊りに露天市
買およ買わんか地元の野菜
二度とないよな品ばかり

追憶の郷

七瀬七谷　七曲がり
清き流れに　濯ぐ糸
巧みなわざに　織る機は
雅やかなる　七瀬織り

絶えて久しき　事なるや
そのわざを知る　人もなく
語り継がれて　幾年ぞ
只　山川が　知るばかり

せせらぎ聞こゆるこの町に
殿がお駕籠を　止める時
いずこも歩む　影はなく
皆ひれ伏して　居たと云う

今尚残る　肥後様が
憩いなされた　茶屋の門
欅　柱に染みる香の
先祖の心　通いくる

野津原民謡

ハアー　田舎なれども野津原は　５３万石肥後領地　ソゥジャナソゥジヤナ　ソウジャガナ
ハアー　今も残るか今市地帯　お駕籠通った石畳　ソウジャナソウジャナ　ソウジャガナ

里謡　七瀬馬子歌音頭

ハアー　里の七瀬で　里の七瀬で馬子歌聞けば
　　古き人の世忍ばるる　エー忍ばるる
ハアー　旅の恋い歌　旅の恋い歌さまざまあれど
　　なでかひかれる馬子唄に　エー馬子唄に
ハアー　村の娘が　村の娘が三人寄れば
　　馬子歌話に花が咲く　エー花が咲く
ハアー　霧の坂道　霧の坂道乗り合いバスが
　　馬子歌乗せて今日も行く　エー今日も行く
ハアー　川の流れに　川の流れにまかせて唄ゃ
　　二の瀬三の瀬府内まで　エー府内まで

しあわせ人生

あなたに逢えた　しあわせは　音に涙を　滲ませて
歌の絆が　あったから　過ぎた苦労を　追いながら
リズムに乗せる　楽しさが　心通わす　楽しさが
あしたの夢を　結びます　あしたの夢を　結びます
生きた証の　花咲かせ　時の刻みも　糧にして

馴染みの顔が　揃うとき
あの日の想い　甦り
話は弾む　楽しさが
あしたの夢を　結びます
たった一度の　人生《ミチ》だから

方言単語

あわず…冗談　面白い話題
あらしこ…元気者の
あおびょうたん…顔色が悪い

ほん…まことに
まめせ…混ぜ合わせ
やといど…加勢を依頼

くちゅうさいだす…話に勝手に加わる
くちがきいちょる…話上手
けじめくせー…布などの燃える匂い

さね…陰核
しりぬぐい…後始末
しみったれ…よく深い　けち
じきたび…地下足袋
じゅうろくむさし…子供の攻め陣取り
すまくろ…隅っこ　片脇
せんばいい…多くを束ねる
せりくりおーち…押し合いせり合う

ゆるーたか…よいから
よったり…４人

ちちぶ…イヌビワ
ちちぼ…イヌビワ
つづら…かずらの一種
つがる…交尾　性交
とわず…冗談
ときのめ…いつの間にか
どちゃみち…いずれにしても
どーき…胸騒ぎ
でけそこなう…出来が悪い

ぬれしょぼ…濡れてみすぼらしい

ひぶくろ…火傷の水泡

方言雑学　『新聞紙上からの響き』

『方言に翻訳　憲法を身近に』　と読者の声で　行政の決まりや書類の文面が　難しいとの意見があった。たしかに難問な字句が並び読み方では　少し間違うと異なる意味になる。

お役所は昔から一部の人が解れば上意下達の時期を　引きずって来たから一般庶民をないがしろにした時代もあった。文書の書き方も肩肘はった文句が素晴らしくいい　と手前勝手に判断してプライドもあるのか　柔らかな文面に改良されない。だから訳文する時に苦労することもあるらしい。

提言者のように方言で地域なりの語句で書くと　説明も誤解もなく解りやすく明瞭である。人が作り人が利用し人の為にあるものが平易に　改善されないのも不思議である。鹿児島のある町長さんは予算獲得に　法の決まりだから　と断わられた時に　法は人間が決めたのだから人間が改正すればよいと　獲得したと聞いた。

沖縄県は標準語励行から一遍　方言への関心が深まったと言う。押しつけられた言葉でなくとも　独自文化を大切に使う事は標準語とは異なった　素晴らしい文化を持っているからだろう。故郷の文化である生活用語は長い間の生活の支えであり　絆でもある文化の言葉だから。方言の味わいもあるのだろう。

全国でユニークな方言イベントも多い。大分県には豊後高田の方言弁論大会が根づいている。方言でしゃべる時言葉が通じなくても語りの　身振り手振りから伝わる温かな言葉は　何か解るような気になって共に笑い泣きも出来る。野津原の方言には京　大阪　肥後などの気持ちが隠されてそれだけ　味わいも深いと思うが。

自然の中に生き続けた方言

生活言葉としち生き続けた方言な　そげー字が読めんでん書けんでん　言葉じ通じち生活ん方便ちゅうち大事に　守り育てられた。時にゃ優しぅ仲介しちくれたり　人の助けじ支えにれちも来た。

大けん声じオラブと半里ぐれーわ聞こゆるし　途中じ聞いたしが中継ぎもしちくれた。そしち煙りじ合図したりもしでーた。

子供ん世界でんハナタレもおりゃー　カサンツーん出来た子もおったが　他所ん子でん自分の子のごつ悪いこつーすりゃ　怒ったもんじゃつた。半纏の袖口ぅ黒ぅしち鼻ぉすすりあげ　オトシにゃ食い物が入っちょると手をツックージ　取っち食う。腹わセカンノカ時にゃ虫がワイタチギューラシイ。セメンエンぬ飲ませにゃ…すると大けな回虫が尻かる出る。時にゃ口かるも。

男ん子は戦争に行かにゃならんき大事に育てにや。女ん子はやんがち子供ぅ生まにゃならんき…時にゃ労働力…嫁姑の因果もあるが互いにセメギアウ気持ちかるじゃろぅ。歴史の中にゃいつでん存在しよるが　本当は昔かる女性は大事にされよった。

振り返るとヒミコん時代かる女ごを中心に　世の中丸く納まるごたる。天照大神の時代でん一番主なもんとしち。宇曾山物語でん女を大事にする気持ちが　女人禁制の元になっちょつたと古老は語りよった。女は大事な体じゃき危ねえ所にや行かせんち決めた。そげん伝承は心の中に女ごを大切にする　優しい男ん思いやりがあったんじゃろぅ。生き抜く底力はやっぱ女ごしにゃ勝たんわな。

方言の中にゃ口ぎたのぅ言う言葉もあるが　裏を返すと女性を心から大事にせにゃち思う　人間本来の姿も垣間見るごたる。じゃきこの世にゃ男と女が《メス　オス》同棲出来るんじゃろぅ。大切にしちゃる事が大事にしちもらいだす　元手じゃろうきなえ。どげー言うてん女ごしん生きる力はやっぱ　男にゃ適わんわな。

方言単語のモザイク模様　1

アタデ言われてん困る……急に言われると困る。オキノに来られてん…起きたばっかりん時に。ノキ食えちゅうてん…だまし食えち言われると。ツキノに……着いたばつかりじゃに。

予期せぬ時ぃ予想外んこちーなる事じゃが　後に続く言葉があるき意味も通ずる。

タンビ　コナスキ　コッカル　ヘモドル　セガウ　ワヤク　サジイ　ホイタラ　イヌル　スツタリ　コラユル　ドチャミチ　セガウ　ストロク　ケンタイ　ヤラト　ヨコウ　ヒコズル

年中ぅいじむるき　ここから帰るで。いいくれー冷やかされたけんど　悪いこたーせんに何でん素早ぇきじゃろう。

ほんなら帰るきち言うたけんど　駄目じゃつたんかち思うたら許すんな。どっちみち冗談ぬ言いよるんじゃろー　何でん自分勝手に言わるりゃ　しかと聞かんでん休むで。そしち癖になっちしまうがいいなえー。……　とまあ　こげな意味になっちくる。人や場所によっちチット違う事もあるが　まぁこげんことかな。

テレンパレン　ナマカタ　ムシル　ヤンガチ　クズス　サラユル　ガンタレ　ボード　ソズル　クルル　マドエ　ヘセ　イテツクバル

仕事もせんじぶらぶらしよると　なまかた悪いち思うんじゃろー草ぅ取りよる。そんうち又何か壊しち　そりゅう言うとさらえられち　無骨せっち何んかにんせん。物は壊すし貰う物ぁねーき　戻せち言うと　減らしゃいいち言うかるもう返答に困ちしまう。

方言でん町内じ地区によっち全く違う意味やら全然使わん単語もある。イテツクバル…主に今市地区で使う。

方言単語のモザイク模様　2

サシクブル　イズル　ヤシボ　チシクラウ　ズーシン　クンズク
タゴカス　カキヤネ　カベナシ　スボ　エバリ　デーラ　イノチキ

早ぅさしくべんと燃えんで　湯が煮えたったらイデち　皆じ食うかな。日ごろさぼりたがるしも来る。下向いたら腰ぅくねらせた。垣根ぅ作っち軒下んゴミぅ寄せたら　クモん巣がいっぱい。こげな平てー所ぃ巣をかけちょる　やっぱ生活するきじゃろー。

ヤゼン　テクノボン　ドドル　ニール　コイサ　ミーチ　ネラム
シューヤ　イジクル　モモグル　ハタカル　ホユル

夕べは手盆のお茶をよばれた。子供ぅあやかすと眠ったごたる。今晩柿ぅむいち貰ぉうかち言うと　睨まれた。それでんしゅーやち言うと　包丁じ柿ぅあたりさげーち　揉みまわす。足ぅひろげち股ぉあけたら叩かれるかと犬がたまがっち泣く。

サルル　アンナ　キミズ　シリベ　グツニュー　ハナンウチ
センキ　クラスミ　トッパ　イテツクバル　フトロクセー　スラコ

されてんいいなち言うたら　今ちょいと胃液が出ちむかつく。知っちょるしは　あやふやじゃき　はじめは中々せんじゃつたが暗ぇ所ならしてもいい話色話し。そりー返事に困っち大きな事じゃつたが　皆んな冗談な話ばっかり。

不特定に方言を広い集めて組み立て　話の筋にするのは難しいが意味を味わいながら読んで行くと方言の味が滲み出る。温かな人の心も伝わり長い間に大事にされた故郷の方言がそっと包んでくれるようです。同じ町内でも全く使わない言葉や地区もあります。……から面白い。

幾つ解りますか言葉のあやでは意味が解るような

オケノ……起きたばかり　ノキ……あまり急に
ホヤ……電球　カマ……変圧器
スソ……女性性器　スボ……男性の包茎
チョウズバ……便所　ツシ……物置の二階
セチボジカヤス……厳しく叱る　ドヤス……ひどく叩く
シャガム……かがみ込む　クンズク……下向く
ツキアゲ……てんぷら　アマシル……ぜんざい
イモジ……腰巻　ヘコ……ふんどし
サビー……目方が軽い　ベンキョウ……安くする
シビトグサ……どくだみ　トビシャク……ほうせんか

コーヤ……染物屋　オトシ……ぽけっと
ユサンゴ……ぶらんこ　ユキアシ……竹馬
トッパイ……とーふ　コガレ……鍋に焦げついた飯
ナガセ……梅雨の雨　ビショヌレ……ずぶ濡れ
コマエ……土壁の中の支柱竹　サカブキ……稲藁で葺いた家
オテショー……手塩皿　ヘギ……木はぎの食器
ドイモ……里芋　タチワケ……なたまめ
カンカラ……さんきらい　チイタツグサ……にら
キナ……ばった　ワクド……かえる
チンドロカタ……血まみれ　チシクリマワス……荒く叩く

スボ……ごみ　置き去りにされて留守番なども言う。オトシ……馬牛小屋の肥やしを落とす場所　牛馬を殺す事も。コガレ……恋しい思いが胸を痛める。

方言を聞いておると何となく解るような気がするのも　方言には人の心に通じる温かさがあるから。語りかけのトボケタ語調は方言のよさ　人を結びつける不思議な思いが育つからだろう。

あ と が き

野津原方言集(前編・後編・こぼれ話)が集大成され、各方面の方々から大きな好評を得ました。

永々と続いた時の流れとこの土地で生き抜いた人々の営みに方言を通して触れていくと、野津原に住む人々の「喜び」「怒り」「苦しみ」「楽しみ」さらに「ロマン」などの感情の中に深く広い文化があるように思えます。

野津原方言調査会は、先般の『野津原方言集』の発行により一応区切りをつけたものの、まだまだ方言に対するこだわりがありました。そこで、「続編・その１」として本誌を編集しました。

本誌をご高覧の上、忌憚のないご意見・ご感想をお寄せ下さい。

野津原方言集…続編№１　《限定》

２版　平成１０年１０月１０日発行

野津原方言調査会会長　甲斐英行
大分県大分郡野津原町高原１０８１
《☎　０９７…５８９…２８０７》